

同志社大学 学習支援・教育開発センター

教育方法・教材開発費助成プロジェクト

日本人学生と留学生との効果的な学び合い

通常授業内での実践に向けた **10** のヒント



2015年6月

同志社大学政策学部 岡田 彩

京都アメリカ大学コンソーシアム 中村 伊都子

はじめに

大学のグローバル化が叫ばれる今日、日本人学生と留学生とが同じキャンパスで学ぶ機会は、今後ますます増えていくと予想されます。特に、国際主義を教育理念の一つに掲げる同志社大学では、多くの留学生を受け入れています。また AKP 同志社留学センターやテュービンゲン大学同志社日本研究センター、スタンフォード技術革新センター、京都アメリカ大学コンソーシアムの留学拠点となっており、多くの留学生が日本人学生と同じキャンパスで学んでいます。同じ空間で学びの時間を共有することにより、言語力の向上や異文化理解など、お互いに学び合うチャンスが増え、国際社会で活躍できる人物の育成に寄与することが期待されます。

学生の声を聞いていくと、こうした期待に反し、同じキャンパスで学ぶ日本人学生と留学生が交わる機会は必ずしも多くないことが分かります。同じ空間にいただけで、必然的に交流が生まれるわけではありません。もちろん、日本人学生と留学生が同じ授業を履修するケースや、国際交流を目的としたサークルもアクティブな活動を展開していますが、お互いを深く知り合い、学び合う機会は決して多くないというのが現状です。

グローバル人材として活躍していく能力やスキル、感覚を習得する上で、日本人学生と留学生は、学びを生み出し、深め合える「他者」として貴重な存在です。今出川・新町キャンパスにおいて、日本人学生と留学生がさらに交流を深め、お互いから学び合う機会をもっと創りだしたい。そのような想いで、同志社大学政策学部で英語を教授言語とした授業を担当する教員と、京都アメリカ大学コンソーシアム（以下 KCJS）でアメリカの大学からの留学生を対象とした日本語の授業を行う教員とが、協働プロジェクトを立ち上げました。一方は、政策学部生向けの「アカデミックスキル」という授業、もう一方は留学生対象の日本語の授業です。性質が異なる科目において、本来の目的を妨げることなく、その枠組内の可能な範囲で「学び合い」の場を設けることが、最も現実的であると考えました。このプロジェクトは、こうした条件の下で、どのような「仕掛け」が日本人学生と留学生との学び合いを高め、深めるのかを模索したものです。

この報告書では、その実践の内容を記すとともに、参加した学生への聞き取り調査やプロジェクト実施前後に行ったアンケートの結果、そして担当教員の振り返りから導き出した、実践に向けた10のヒントを提示します。私たち自身の今後の実践のみならず、他学部や他大学での実践に反映され、今後日本の大学において日本人学生と留学生との学び合いがさらに促進することを願っています。

2015年6月

同志社大学政策学部 岡田 彩
京都アメリカ大学コンソーシアム 中村 伊都子

目次

1. 背景と目的	5
2. 実践内容	7
2-1. 対象とした授業	7
2-2. 学び合いを促進する「仕掛け」	9
2-2-1. 共通の目的の下、共に協力して行う学び	9
2-2-2. それぞれの目的のために、互いに力を貸し合う学び	11
2-2-3. インフォーマルな学び	13
3. 「学び合い」の成果	16
3-1. 政策学部生の学び	16
3-2. KCJS 生の学び	17
3-3. 「仕掛け」別に見る学び	18
3-3-1. 共通の目的の下、共に協力して行う学び	18
3-3-2. 互いの目的のために、力を貸し合う学び	21
3-3-3. インフォーマルな学び	22
4. 効果的な「学び合い」を創出するための課題	24
4-1. 前期のフィードバックに見る課題	24
4-1-1. 政策学部生のフィードバック	24
4-1-2. KCJS 生のフィードバック	24
4-2. 前期のフィードバックに基づき後期に行った改善	25
4-3. 改善の結果	26
4-4. 後期のフィードバックに見られる課題	27
4-4-1. 政策学部生のフィードバック	27
4-4-2. KCJS 生のフィードバック	27
4-5. 後期のフィードバックに基づいた今後の改善点	28
5. 通常授業内での実践に向けた 10 のヒント	28
謝辞	32

付録

付録①授業シラバス（政策学部・春学期）

付録②授業シラバス（政策学部・秋学期）

付録③授業シラバス（KCJS・サマータム）

付録④授業シラバス（KCJS・フォールセメスター）

付録⑤取材プロジェクト「京都のプロフェッショナルに学ぶ」の流れ

付録⑥合同授業の教案（10月20日実施分）

付録⑦事前事後アンケートおよび聞き取り調査実施概要

付録⑧事前アンケート用紙（政策学部・春学期用）

付録⑨事前アンケート用紙（KCJS・サマータム用）

付録⑩事後アンケート用紙（政策学部・春学期用）

付録⑪事後アンケート用紙（KCJS・サマータム用）

付録⑫事前アンケート用紙（政策学部・秋学期用）

付録⑬事前アンケート用紙（KCJS・フォールセメスター用、英語版）

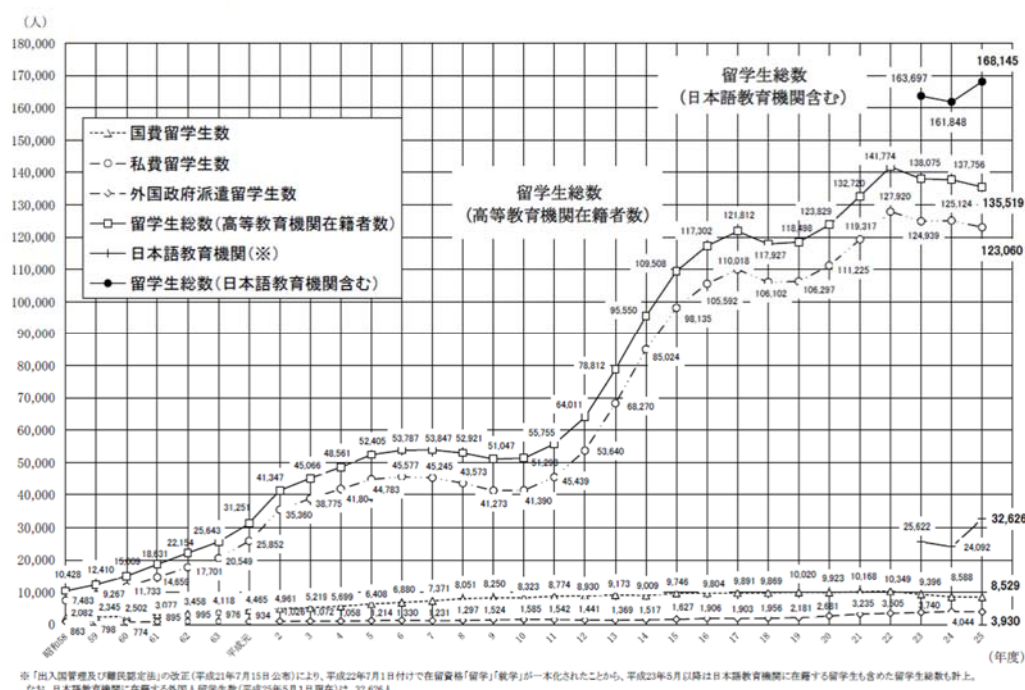
付録⑭事後アンケート用紙（政策学部・秋学期用）

付録⑮事後アンケート用紙（KCJS・フォールセメスター用、英語版）

1. 背景と目的

グローバル化がますます加速する今日、日本の大学において、日本人学生と留学生とが同じキャンパスで学ぶ機会はますます増えていくと予想される。2013年5月1日現在、日本で学ぶ留学生数は135,519人であり、前年に比べて1.6%増加している¹。さらに文部科学省では、外国人留学生を2020年までに30万人に倍増させるイニシアティブを進めている²。こうした流れを受けて、各大学では、英語を教授言語とした授業を増やすなど、留学生を受け入れる体制を整える取り組みを推進しているという現状がある。

留学生数の推移(各年5月1日現在)



図表 1 日本国内における留学生数の推移³

日本人学生と留学生が、同じキャンパスで学生生活を送ることにより、交流の機会が増え、お互いに学び合う機会が増えることが期待されている。日本人学生は外国語を、留学生は日本語力を伸ばすチャンスになると考えられ、また異文化理解、異文化間コミュニケーション力、異文化

¹独立行政法人日本学生支援機構 (2014) 「平成 25 年度外国人留学生在籍状況調査結果」
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data13_01.pdf (2015 年 4 月 3 日最終アクセス)

²文部科学省 (2013) 「今後の留学生政策について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1338568.htm
 (2015 年 4 月 3 日最終アクセス)

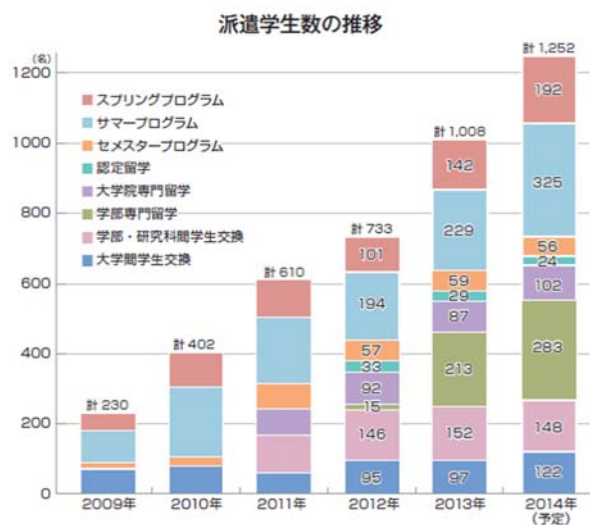
³独立行政法人日本学生支援機構 (2014) 「平成 25 年度外国人留学生在籍状況調査結果」
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data13_01.pdf (2015 年 4 月 3 日最終アクセス)

間トレランス、チームワーク、社会性、傾聴をはじめとする能力や、学習意欲の向上など、様々な学びが促進されると考えられる。大学でこうしたスキルや能力、国際感覚を向上させることが、国際社会で活躍できるグローバル人材の育成に寄与すると期待される。

日本人学生と留学生は、学びを生み出し、深め合える「他者」であるという意味において、貴重な存在であると考えられる。しかしながら、学生の声を聞いていくと、同じキャンパスで空間を共有しつつも、お互いに接する機会は決して多くないことが分かる。例えば、英語を上達させたいという政策学部生に「留学生のお友達を作ったら？」と提案すると、「留学生と接する機会がない」という声が多く聞かれる。また留学生からは「せっかく留学して日本の大学のキャンパスにいるのに、日本人学生との関わりが期待したほどなく、残念だった」という声が多く聞かれる。同じ空間にいただけで、必然的に交流が生まれるわけではない。お互いを深く知り合い、学び合うチャンスを積極的に創り出していくことが求められるのである。

以上の問題意識から、本プロジェクトでは、日本人学生と留学生との効果的な「学び合い」に向けた授業デザインの開発を目指した。同志社大学政策学部で英語を教授言語とする授業を担当する教員（岡田）と、同志社大学今出川キャンパスを拠点とする「京都アメリカ大学コンソーシアム（通称 KCJS）」で日本語クラスを担当する教員（中村）が協力し、日本人学生とアメリカの大学から派遣されてきている留学生とのコラボレーションを計画、実施した。実践的なコミュニケーションを通じた「学び合い」を創出し、グローバルな人材を育成する授業に求められる要素を抽出するプロジェクトである。

こうした日本人学生と留学生間の「学び合い」の促進に向けては、交流自体を目的とした新たな科目を設置するケースも見られる。しかし本プロジェクトでは、あくまでも通常の一般教養科目や専門科目を担当する教員の立場から、本来の科目の目的を妨げることのない、現実的かつ着実な協働プロジェクトの実施を目指した。双方における既存のカリキュラムの中で「学び合い」の創出を目指すことで、汎用性が高くなり、対象となる科目、学生の数および幅の広さを確保できると考えられる。例えば同志社大学において、派遣留学や学期ごとのプログラムを通じて海外経験を積むことのできる学生は、およそ 1,200 人程度と限られている（図表 2 参照）。しかしながら、通常授業の中で、お互いの授業の目的を維持しつつ、「学び合い」を促進する「仕掛け」を設けることができれば、留学が叶わない学生も、日本のキャンパスに居ながらにして、外国語運用能力の向上と異文化理解の深化を図ることが可能になる。また留学生側にとっても、日本人学生との協働を通じて、日本語の運用能力、社会言語能力、異文化間コミュニケーション能力を高めることができる。これこそが留学の醍醐味であり、留学を通してしか得られないかけがえないチャンスである。「学び合い」の促進は、日本人学生と留学生の双方に利益をもたらすことが期待されるのである。



図表 2 同志社大学における派遣留学生の推移⁴

この報告書では、2014年度に行った実践の内容を説明した後、「学び合い」の効果の分析結果を提示する。プロジェクトでは、関連文献・研究を手掛かりに、日本人学生と留学生との「学び合い」が期待される側面の指標とその測定方法を特定し、各学期始めおよび学期末に紙媒体のアンケートを実施した（付録⑧～付録⑮参照）。また一部の参加者を対象としたフォーカス・グループ・インタビューも実施している（付録⑦参照）。こうしたデータ、および担当教員の振り返りから、日本人学生と留学生との効果的な「学び合い」に貢献する要素を抽出し、「10のヒント」という形で提言する。

2. 実践内容

2-1. 対象とした授業

本プロジェクトは、同志社大学政策学部にて岡田が担当する授業と、京都アメリカ大学コンソーシアム（KCJS）にて中村が担当する授業において実践した。図表 3 に、その概要をまとめる。なお「前期」は政策学部の春学期（4月～8月上旬）および KCJS のサマータム（6月～7月）、「後期」は政策学部の秋学期（10月～2月上旬）および KCJS のフォールセメスター（9月～12月）を指す。各授業のシラバスは、付録①～④を参照されたい。

⁴同志社大学（2015）『経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（GGJ）同志社大学の取り組み』

図表3 プロジェクトを実施した科目およびその内容

	授業名	対象者	人数	授業の目的	備考
前期	政策学部 アカデミックスキル2 国際社会に通じる コミュニケーション スキルを身に付けよう	政策学部 2年生	計36名 18名× 2クラス	国際社会に通じるコミュニケー ション・スキルとは何かを理解 し、実践に移すことができる。	教授言語は英語および日本語。学生に よる最終レポート、プレゼンテーショ ンは英語で行う。
	KCJS 夏期日本語 集中講座	学部2年生 ～大学院生	計5名	人との関わりにおいて四技能を 駆使することにより、総合的に 日本語の運用能力を高め、日本 文化理解を深める。	タスクベースの上級日本語クラス。
後期	政策学部 アカデミックスキル1 国際協力・開発に携わる 意味を考えよう	政策学部 1年生	計36名 18名× 2クラス	国際協力・開発に携わる上で直 面するジレンマや疑問について 論理的に議論することができる。	教授言語は英語および日本語。学生に よる最終レポート、プレゼンテーショ ンは英語で行う。
	KCJS フォールセメスター 日本語クラス	学部3年生	計5名	人との関わりにおいて四技能を 駆使することにより、総合的に 日本語の運用能力を高め、日本 文化理解を深める。	タスクベースのクラス。 日本語レベルは中級。

2-2. 学び合いを促進する「仕掛け」

本プロジェクトでは、「共通の目的の下、共に協力して行う学び」「それぞれの目的のために、互いに力を貸し合う学び」「インフォーマルな学び」の三つの異なるタイプの「学び合い」の機会を、「仕掛け」として各授業内で実施した。図表4に、その実施概要をまとめる。このセクションでは、三つの仕掛けについて、それぞれ詳しい実践内容を報告する。

2-2-1. 共通の目的の下、共に協力して行う学び

前期（政策学部・春学期/KCJS・サマータム）

① 「京都のプロフェッショナルに学ぶ」取材プロジェクト

KCJS 生 1 名と政策学部生 2~3 名がグループを形成し、上京区在住の職人を対象に、その仕事の内容や仕事に取り組む姿勢について取材を行い、それぞれの授業で発表するというプロジェクトである。KCJS 生は全員参加としたが、政策学部生は絶対数が多いことから、希望者のみが参加した。いずれも、授業時間外での活動が主となった。

職人への訪問は、合計2度行った。1度目の訪問は顔合わせとし、職人さんと取材班が自己紹介をし、お互いに知り合うことを目的とした。2度目の訪問では、KCJS 生を中心に日本語で取材を行った。政策学部生は、言語、マナー、文化理解、コミュニケーションなど、多面的なサポートを提供した。取材後には、チーム毎に取材内容や感想を共有する振り返りのセッションを行い、後日、政策学部生は英語、KCJS 生は日本語を用いて、それぞれの授業で成果を発表した。



糸あやつり人形劇団「みのむし」
での取材模様



魔鏡（青銅鏡）のデモンストレーション中
於 山本合金製作所

**京都アメリカ
大学コンソーシアム**
全てはお客さんのために
挑戦を楽しむ和菓子屋さん
「御菓子司 聚洗」

本学に留学拠点を置く「京都アメリカ大学コンソーシアム」は、2013年夏より、主に上京区内の伝統産業の職人さんを取材し、上京区役所のホームページ「カミング」から記事を発信するプロジェクトを実施してきた。この夏も政策学部の「アカデミック・スキル」の履修者と共に5人の留学生が5人の職人さんに取材を行った。

アメリカで都市計画を学ぶ中国人留学生ヤオ・シオンさんは、ものづくりを志す身として、西陣の「御菓子司 聚洗」の高家裕典さんを取材。材料等の制約をバネに、味や食感はもとよりデザイン性に優れた和菓子作りに挑戦し続け、産みの苦しみをも楽しむ高家さんのあり方を、ヤオさんは、いくつかのエピソードを通して生き生きと描いている。「試行錯誤の繰り返しだが、平常心があればどんな過程でも楽しめる」と語る高家さんの姿勢に感銘を受け、自分も平常心を持ち一生懸命に仕事をする人になりたいと結ぶ。

取材チームの政策学部生の感想

いつもはなんとなく流しているあたりまえのようなことにも目を向ける素敵な経験になった。職人さんの和菓子に対する考え方がとても素敵で、思いがこもっていると感じた和菓子は前よりももっとおいしく感じる。

(政策学部2年 藤原優佳さん)



(左より：三宅敬子さん、藤原優佳さん、筆者、林将城さん)

伝統の技を連続と継承してきた職人の宝庫・京都には、仕事自体を目的・楽しみとするプロフェッショナルが少なくない。記事を通して職人さんの生きざまにふれ、「仕事」について考える手だてにして欲しい。

このプロジェクトは、学習支援・教育開発センターの助成で実施されました。

地域情報誌・フリーペーパー『イマ*イチ』2014年10月号(No.49)に記事掲載

② ソーシャル・マーケティングに関する合同授業（フィールドワーク）

岡田が政策学部で行っていたもう一つの授業「アカデミックスキル2：ソーシャル・マーケティングに学ぶ政策コミュニケーション」において、社会的な課題の解決を目指すキャンペーンを積極的に推進している化粧品企業 LUSH への訪問が企画されたことを受け、これに KCJS の留学生も参加することとなった。訪問に先立ち、岡田がソーシャル・マーケティングの基本的な考え方について⁵、KCJS で日本語での授業を行い、訪問後、振り返りのセッションを行った。両日共、午前中に授業がない政策学部生も参加した。KCJS 生は、LUSH 訪問での観察に基づき、本国のソーシャル・マーケティングと日本におけるソーシャル・マーケティングの共通点と相違点を発表し、政策学部生と共に、学びを共有し合った。

⁵社会問題を解決する上で、人々の考え方や行動の変容を促すことが求められる際、ターゲットとすべき人々を見極め、効果的なアプローチを考案し、実施するというもの。

後期（政策学部・秋学期／KCJS・フォールセメスター）

① 異文化間コミュニケーションの学びを共有する

前期と同様、職人への取材プロジェクトを実施予定であったが、フォールセメスターに来日した KCJS 生を対象に日本語レベルの振り分け試験を実施した結果、担当するクラスの学生の日本語レベルでは、学外で取材をさせることは難しいと中村が判断した。そこで当初取材予定であった職人を大学にお招きし、クラス全体でお話を聞くセッションを設けることにした。岡田クラスの学習内容が国際協力の現場における異文化間コミュニケーションであったこともあり、仕事の内容や仕事への取り組み方だけでなく、国際的に活躍する職人が経験した異文化体験（自分の「当たり前」が「当たり前」でなくなった出来事、異文化衝突のエピソード）を話してもらうことにした。講義は日本語で行われたが、政策学部生は KCJS 生とのやりとりを英語で、KCJS 生は政策学部生とのやりとりを日本語で行った。

2-2-2. それぞれの目的のために、互いに力を貸し合う学び

前期（政策学部・春学期／KCJS・サマータム）

政策学部生と KCJS 生が、それぞれの授業で取り組むレポート課題を互いに読み合い、推敲し合う「ピア・エディティング」を行った。両クラスの学生数が不均衡であったため、中村クラスの留学生が全員、活動を義務づけられていたのに対して、政策学部では希望者を募った。その上で、中村クラス以外の KCJS にも広く声をかけ、できるだけ多くの政策学部生が参加できるように工夫した。

KCJS 生は、政策学部生がポリシーメモを英語で作成する際に、表現や文法上のアドバイスを行ったほか、英語のプレゼンテーション準備のサポートを行った。政策学部生は、KCJS 生の取材記事の下書きを読み、表現や文法上のアドバイスを行った。



お互いの課題を助け合う

後期（政策学部・秋学期／KCJS・フォールセメスター）

学期始めに岡田クラス、中村クラスを三つのグループに分け、学期を通して以下の助け合いを行った。

① KCJS 生の政策学部生に対するサポート

岡田クラスでは、教科書として使用していた“Tropical Gangsters”という英語の文献を 3 つの小グループが 1 章ずつ担当し、概要をクラスで発表するという課題があった。KCJS 生が各グループに 1~2 名入り、各グループが担当した章の内容理解を支援した。また、その章の要約を読み、要点が正確にまとまっているかどうか、また英語の誤りがないかどうかを確認した。教員からは、文法、表現などを直す際に、何が問題なのか説明をした上で訂正するよう、KCJS 生に指示した。学生は、キャンパスで会って作業を行った。

② 政策学部生の KCJS 生に対するサポート

KCJS では、2009 年以降、日本語の授業の一環として「地域参加型プロジェクト」(Community Involvement Project、以下 CIP) を実施してきた。フォールセメスターは、「京都のプロフェッショナルに学ぶ」プロジェクトの代わりに、CIP の活動場所であるサークルやボランティア、お稽古場などをエスノグラフィーの「フィールド（現場）」と捉え、特に言語・文化的側面に着目しながら、その現場ではどのような言語・文化的規範に則ったコミュニケーションが行われているかを内側から観察するというプロジェクトを行った。学期が 3 分の 2 過ぎた時点で、規範に関する仮説を立て、残りの期間でこれを検証した。検証では、異なる年齢層の日本人を対象に聞き取り調査を実施し、学期末にその結果を発表した。

サポートとしては、KCJS 生が担当した政策学部生のグループのメンバーが、聞き取り調査に回答者として協力したほか、調査結果をまとめた期末発表の原稿の読み手になり、日本語のチェックを行った。

2-2-3. インフォーマルな学び

アカデミックな目的を持った授業だけでなく、インフォーマルな形で楽しい時間を共有する機会として、交流会を実施した。政策学部生、KCJS生の有志が中心となって企画したゲームなどを楽しむ時間となった。この交流会をきっかけに、各自連絡を取り合い、遊びに行くなど、さらなる交流に発展した学生も見られた。



前期（春学期／サマータム）交流会
於新町キャンパス臨光館
ジェスチャーゲームの様子



後期（秋学期／フォールセメスター）交流会
於アーモストゲストハウス
名前紹介ゲームの様子



後期（秋学期／フォールセメスター）集合写真

図表 4 実践内容のまとめ：前期（政策学部・春学期/KCJS・サマーターム）

日時	内容	参加人数	「仕掛け」の種類
6月12日（金） 10:10-12:00	岡田講義 於 KCJS ソーシャル・マーケティング	KCJS・5名 政策学部・3名	共通の目的の下、 共に協力して行う学び （以下、共通の目的）
6月13日（金） 2:50-16:30	フィールドワーク （LUSH 訪問）	政策学部・18名 KCJS・5名	共通の目的
6月16日（月） 16:40-18:10	交流会	政策学部・17名 KCJS・11名	インフォーマルな学び
6月16日（月） 13:30-14:30	糸あやつり人形・顔合わせ	政策学部・2名 KCJS・1名	共通の目的
6月17日（火） 9:10-10:00	岡田講義 於 KCJS LUSH 訪問振り返り&共有	KCJS・5名 政策学部・2名	共通の目的
6月17日（火） 15:30-16:30	金箔・顔合わせ	政策学部・3名 KCJS・1名	共通の目的
6月18日（水） 13:00-14:00	鎧・顔合わせ	政策学部・3名 KCJS・1名	共通の目的
6月19日（木） 16:00-17:00	魔鏡・顔合わせ	政策学部・2名 KCJS・1名	共通の目的
6月19日（木） 15:30-16:30	和菓子・顔合わせ	政策学部・3名 KCJS・1名	共通の目的
6月23日（月） 13:00-15:00	糸あやつり人形・本取材	政策学部・2名 KCJS・1名	共通の目的
6月23日（月） 13:30-15:30	鎧・本取材	政策学部・2名 KCJS・1名	共通の目的
6月24日（火） 14:00-16:00	和菓子・本取材	政策学部・3名 KCJS・1名	共通の目的
6月24日（火） 15:30-17:30	金箔・本取材	政策学部・2名 KCJS・1名	共通の目的
6月26日（木） 15:30-17:30	魔鏡・本取材	政策学部・2名 KCJS・1名	共通の目的
7月1日（火） 9:00-11:00	フリーライターによる 取材記事のまとめ方講座 於 KCJS	KCJS・5名	共通の目的

6月30日(月) ～ 7月25日(金)	ピア・エディティング	政策学部・14名 KCJS・11名	互い目的のために、 力を貸し合う学び (以下、助け合い)
7月25日(金) 9:10-10:50	KCJS 期末発表 於 KCJS	KCJS・5名 政策学部 TA・1名	助け合い

図表5 実践内容のまとめ：後期（政策学部・秋学期/KCJS・フォールセメスター）

10月15日(水) 9:10-11:00	岡田講義 於 KCJS 異文化体験について	KCJS・5名 政策学部・2名	インフォーマルな学び
10月17日(金) 11:00-14:00	交流会 於アーモストハウス	政策学部・31名 KCJS・33名	インフォーマルな学び
10月20日(月) 16:40-18:10	合同授業（和食職人）	政策学部・18名 KCJS・5名	共通の目的
10月20日(月) 18:30-	学食で夕食を共にする	政策学部・15名 KCJS・5名	インフォーマルな学び
11月10日(月) 16:40-18:10	合同授業 （糸あやつり人形職人）	政策学部・18名 KCJS・5名	共通の目的
11月10日(月) 18:30-	学食で夕食を共にする	政策学部 15名 KCJS・5名	インフォーマルな学び
10月20日(月) ～ 11月17日(月)	政策学部生のプロジェクト （“Tropical Gangsters”の要約 発表）を KCJS 生が支援 （グループ）	政策学部・12名 KCJS・5名	助け合い
11月26日(木) 9:10-11:00	合同授業（能楽師）	政策学部・3名 KCJS・5名	共通の目的
12月16日(火) 10:00-12:00	フィールドワーク（茶道）	政策学部・4名 KCJS・5名	共通の目的
11月17日(月) ～ 12月11日(木)	KCJS 生のプロジェクト （異文化体験に関する仮説 を検証、日本語で発表）を 政策学部生が支援（ペア）	KCJS・5名 政策学部・12名	助け合い
12月11日(木) 9:10-11:00	KCJS 期末発表に 政策学部生が 聴衆として参加 於 KCJS	KCJS・5名 政策学部・12名	助け合い

3. 「学び合い」の成果

このセクションでは、アンケート調査および聞き取り調査から、政策学部生、KCJS生がそれぞれどのような「学び」があったと感じたかを分析する⁶。また「仕掛け」別に見られた学びについても、分析結果を報告する。なお、参加した政策学部生とKCJS生の母数には大きな差異がある点に注意されたい。政策学部生の母数が36名であるのに対し、KCJSは5名である。このため、分析結果は基本的にパーセンテージで表記する。

3-1. 政策学部生の学び

最も多く聞かれたのは、KCJS生の高い日本語能力への尊敬の念である。日本語の運用能力のみならず、敬語を使ったり、謙遜するというような社会言語能力も発達している点に驚いた政策学部生が多かったようである。また文学や古文にも精通しているKCJS生の目の当たりにし、自分も負けてはいられないという思いを持った学生も見られた。同時に、KCJS生が日本語で取材やプレゼンテーションを行う姿から、言語が完璧ではなくとも、内容は十分伝わるという気づきを得た学生もいた。

KCJS生の学習態度や学習意欲の高さに触発されたという声も多く聞かれた。やる気や探究心、物事を掘り下げる力の高さや、授業での積極性に刺激され、自分ももっと勉学に励まなければという思いに駆り立てられたようである。もっと真剣に留学を検討しようと思った学生や、留学する際には何がしたいのかを明確にすることが重要だと気付いた学生もいた。また、学生のプレゼンテーション後に質疑応答を行った際、留学生が自分では考えつかないような質問をするのを聞いて刺激的だったという回答もあった。

肯定的な異文化体験に言及した政策学部生も多く見られた。文化の違いを身近に感じたり、相手の文化の一端を理解できたと感じたようである。また言語が違っても、ボディランゲージなどを介してコミュニケーションが可能だということを実感したという学生もいた。「外国の人々が持つ日本に対する考え方を知った」「自分とは異なる視点から日本を見ることができた」「日本での当たり前は外国の当たり前とは違うということを知った」などの回答も見られた。相違点のみならず、共通点を見出した学生もいた。「外国人だからといって皆がフレンドリーというわけではない」「やる気のない人もいれば、シャ

⁶政策学部生の中には、韓国からの留学生1名（前期）、中国からの留学生1名（後期）が含まれている。短期留学であるKCJS生とは異なり、長期的に日本で学んでいる留学生の学びを特定することも重要であるが、本報告書では彼らを日本人学生と同じ「政策学部生」として捉え、分析する。

イな人もいる点は留学生も日本人も同じ」というように、先入観が覆されたという声も聞かれた。

職人への取材プロジェクトが、日本を知る機会となったと回答した学生も多く見られた。日本の伝統を学んだり、日本文化のあり方や特徴を再確認できたようである。また取材時の経験から、「日本のことを説明できなかった」「もっと日本のことを知らないといけない」という声も聞かれた。

特に国際的な経験が少ない学生の間で、「外国人の友達ができた」「外国人と話せた」という喜びの声も聞かれた。また英語への理解が深まったとした学生がいる一方、英語で話すことの難しさを痛感させられた学生も見られた。

3-2. KCJS 生の学び

留学生にとっては、日本の大学の授業に参加できたことがかけがえのない経験になったようで、これに関する言及が最も多かった。日本の教室でどんな活動が行われているのか、日本人学生がどんな態度で授業に望むのか、どのように発表を行うのか、どんな国際問題に興味があるのかを知ることができてよかったという声が聞かれた。KCJS では、日本語の授業に加え、日本の社会や文化に関する専門科目が開講されており、これに日本人の学生も数名登録するため、教室内における日本人学生との接点が皆無というわけではない。しかしながら、日本人学生を対象とした科目に KCJS の学生が参加することは、本プロジェクトの実施を通して初めて実現されたことであり、非常に画期的で、意義深い取り組みであったと言える。

日本語の言語的・社会言語的な側面に言及した学生も多く、特に敬語に関する学びが強く実感されたようである。「岡田先生との関わりにおいて敬語で話す機会が多く、敬語力が伸びた」「取材先で日本人学生が相手によって砕けた話し方と敬語を自由自在に操っているのを見て刺激になった」「敬語の使用が心理的距離感を生むことが実体験できた」などの声が聞かれた。他には「日本人学生との交流から、授業では習わない砕けた言葉や俗語を学んだ」「ピア・エディティングの際、どこが日本語として不自然なのか説明を受けた上で自然な日本語に直してくれて勉強になった」という回答もあった。

さらに、教室内活動やグループ活動の実践を通して、日本人学生は大きいグループの中では発言が消極的だが、小さいグループの中では少し積極さが増すことが分かり、活動は小グループでする方が有効だという異文化間コミュニケーションに関する気づきがあった

学生や、英語でも分かりにくいコンセプトをいかに分かりやすく日本語で説明するかなど、コミュニケーション上の戦略に関する気づきを持った学生も見られた。

また「自国の文化を外国で発信する上でのチャレンジとストラテジーを知ることができた」「舞台芸術の世界では、プロが協働する上で言葉は不要だと聞いて感動した」というような、ゲスト講師による講義からの副次的な学びも挙げられた。

KCJS 生は、政策学部生との協働を通して、本国の日本語の教室内では得られない、留学先ならではの学びを多く得たようである。

3-3. 「仕掛け」別に見る学び

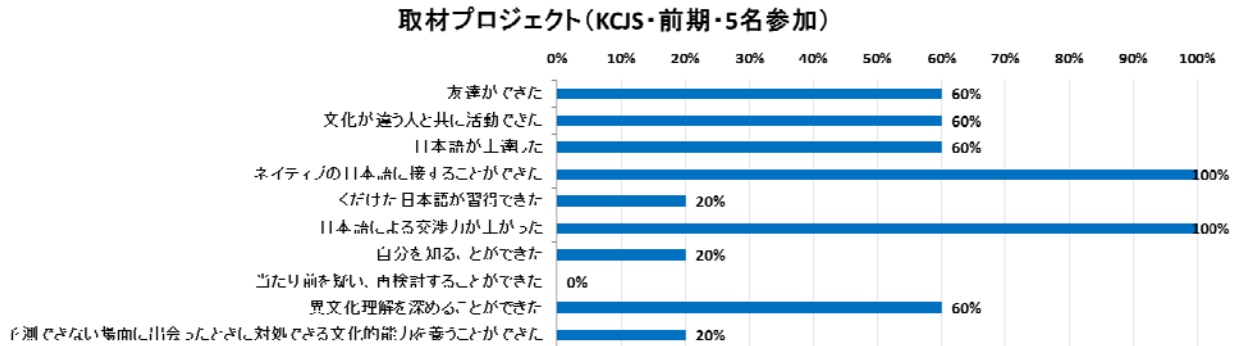
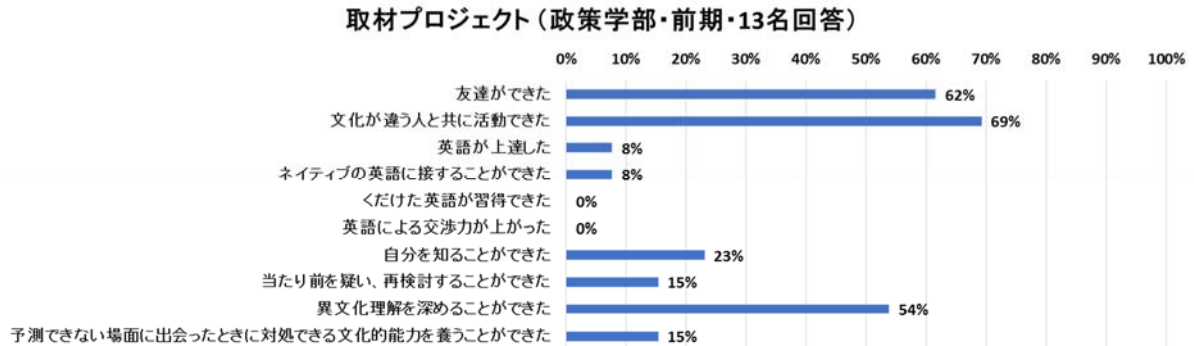
本プロジェクトでは、「共通の目的の下、共に協力して行う学び」「互いの目的のために、力を貸し合う学び」「インフォーマルな学び」という3つのタイプの「仕掛け」を導入した。それぞれの「仕掛け」は、目的や学生の変わり方が異なる。「仕掛け」によって、参加した学生が感じた学びに差異はあったのだろうか。このセクションでは、アンケート調査および聞き取り調査の結果から、「仕掛け」別に学生の「学び」を分析する⁷。

3-3-1. 共通の目的の下、共に協力して行う学び

図6は、前期に実施した取材プロジェクトから得た学びとして、参加した学生が事後アンケートで回答した結果をグラフ化したものである。この二つのグラフを見ていくと、政策学部生とKCJS生が主な学びとして認識した事柄に違いがあったことが浮かび上がる。参加したKCJS生全員が「ネイティブの日本語に接することができた」「日本語による交渉力が上がった」という言語に関する学びを選択しているのに対し、政策学部生は「文化が違う人と共に活動できた」「異文化理解を深めることができた」など、異文化との触れ合いを学びとして感じとった学生が多かった。KCJS生にとっては、日本で学んでいること自体が既に異文化体験となっており、日本語の授業外で日本語をコミュニケーションの媒体として使うことを通して得た学びを最も強く認識したようである。一方、日本での日常生活の中にある政策学部生にとっては、アメリカの大学からやってきた留学生と接するチャンスそのものが、学びとして捉えられたようである。

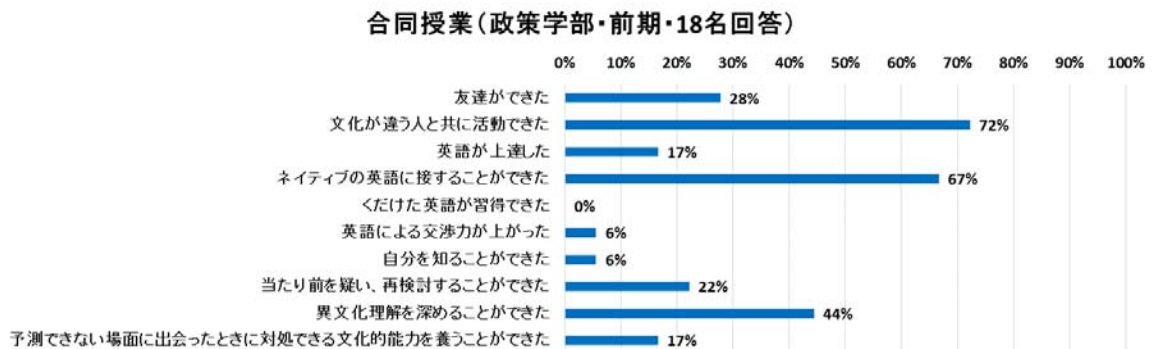
⁷本プロジェクトで実施した事前事後アンケートでは、先行研究に依拠する形で、「異文化に関する学び」を「言語と文化」「態度」「考えるスキル」の3点から測定する質問群も提示していた(付録⑧～⑩参照)。前期、後期で聞き方の変更を試みたこと、また結果の分析から、意義ある形で学びを測定する尺度とはなっていないのではないかと、という疑問が生じたことから、本年度はその詳細を報告せず、今後の検討課題とする。

図表 6 取材プロジェクト（前期）の学び

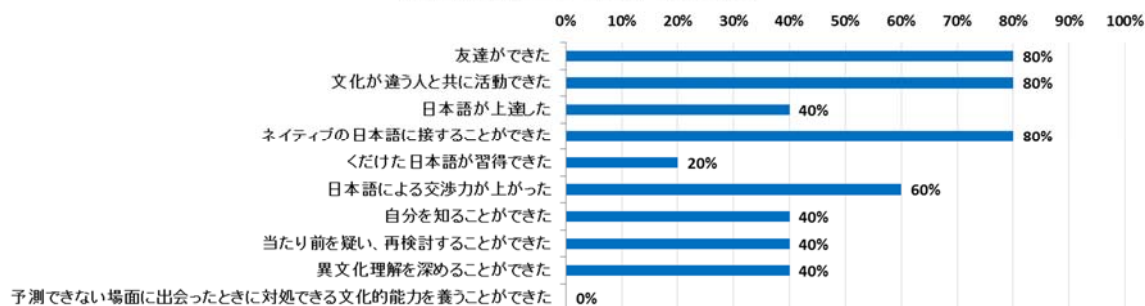


図表 7に見られるように、前期に実施した合同授業では、政策学部生、KCJS 生のいずれにおいても、「文化が異なる人と共に活動できた」「ネイティブの言語に接することができた」を学びとして選択した参加者が多かった。

図表 7 合同授業（前期）の学び



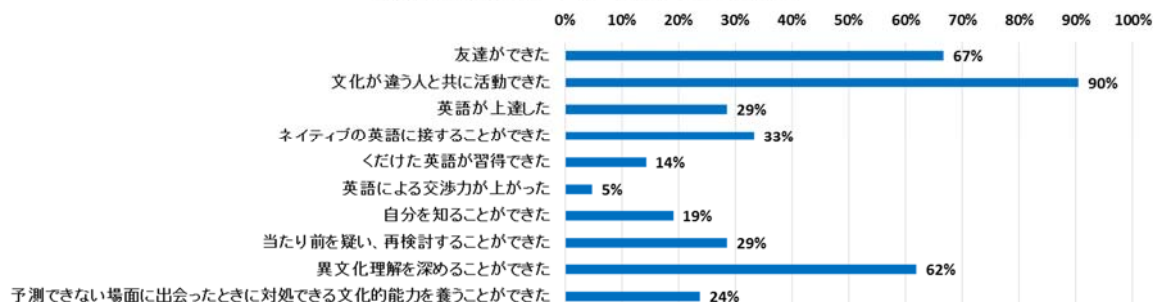
合同授業 (KCJS・前期・5名参加)



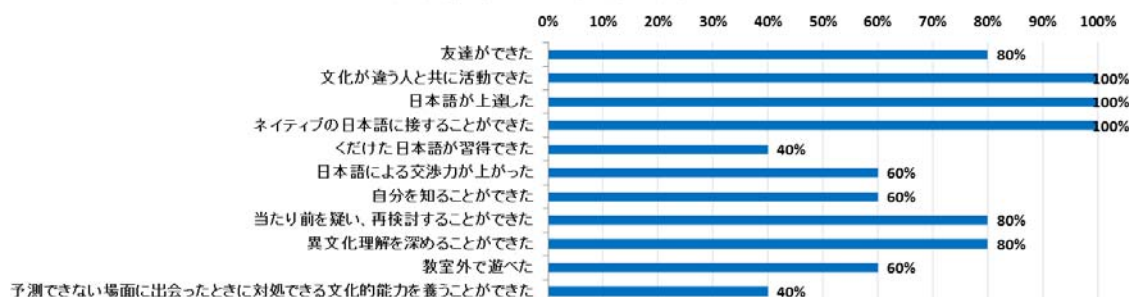
後期に実施した合同授業でも、前期の取材プロジェクトと同様の学びの傾向が見られた (図表 8 参照)。政策学部生の多くが異文化との触れ合いを学びとして選択しているのに対し、KCJS 生は「言語の上達」や「ネイティブの日本語に接したこと」を挙げている。また、後期の合同授業において「当たり前を疑い、再検討することができた」を学びとして挙げた参加者が特に KCJS 生において多い点も、注目に値する (80%)。

図表 8 合同授業 (後期) の学び

合同授業 (政策学部・後期・21名回答)



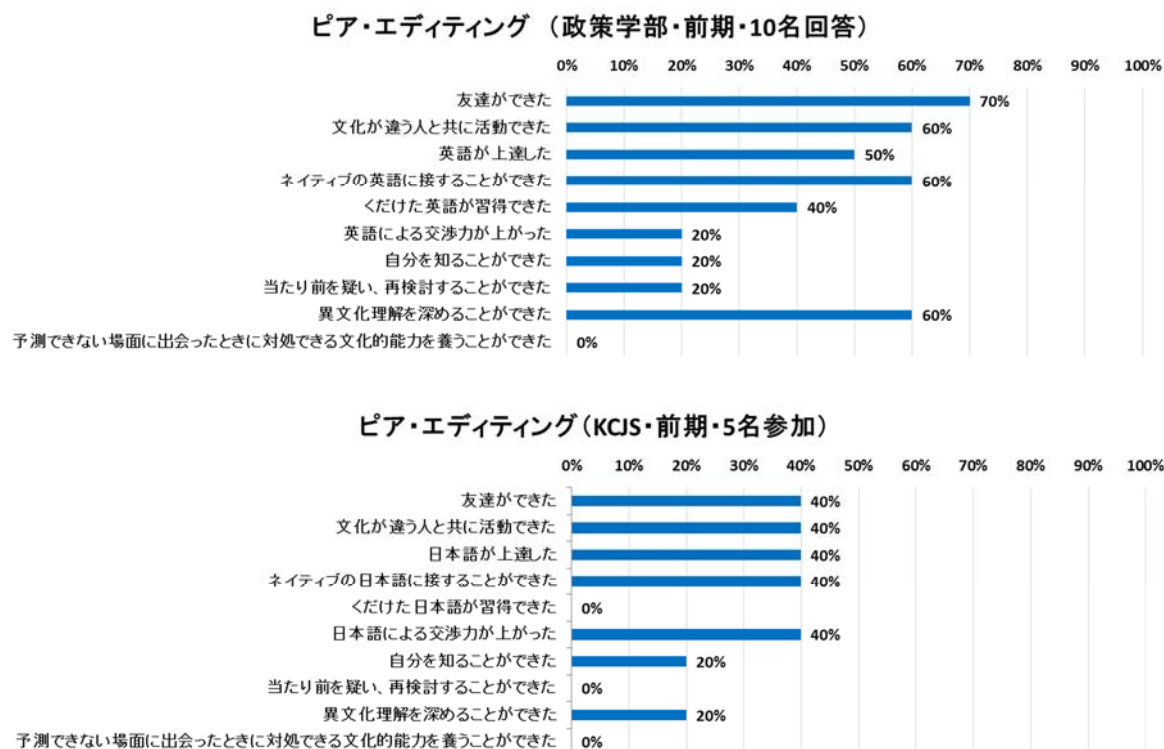
合同授業 (KCJS・後期・5名参加)



3-3-2. 互いの目的のために、力を貸し合う学び

図表9から読み取れるように、前期に実施したピア・エディティングは、政策学部生、KCJS生のいずれにおいても、友達作り、異文化との触れ合い、言語能力の向上と、多方面に渡って得たものがあったようである。ただし、KCJS生よりも政策学部生の方が、この仕掛けからの学びを得たと回答した参加者の割合が多い。お互いの原稿を推敲し合うピア・エディティングは、どうしても実施期間が双方の学期末になってしまうため、スケジュール調整が難しく、教員が期待したほど作業が進まなかったペアもいたようである。KCJS生にとって必ずしも学びとを感じるものにつながらなかった一要因だと考えられる。

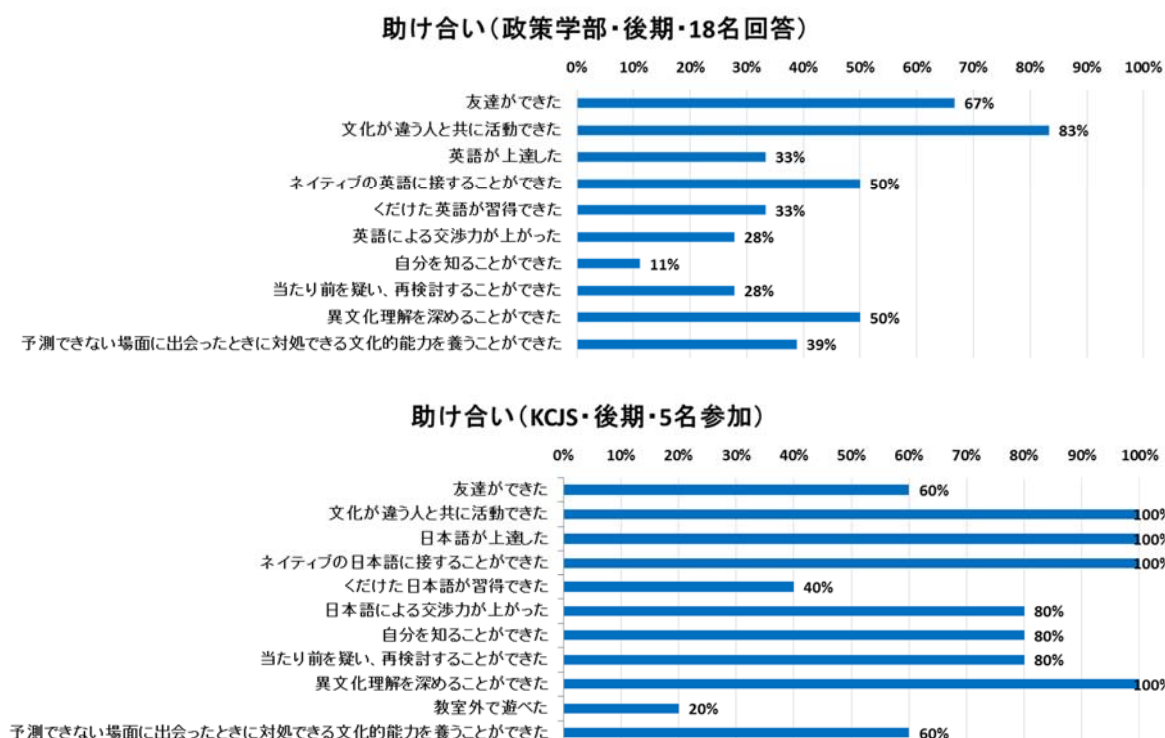
図表9 ピア・エディティング（前期）の学び



後期に実施した助け合いにおいては、KCJS生は異文化との触れ合い、言語能力の向上、さらには日本語による交渉力の向上などの学びを得ていた。特筆すべきは、80%のKCJS生が「自分を知ること」「当たり前を疑い、再検討すること」を選択したことである。これは、“Tropical Gangsters”のサポート活動がきちんと遂行された証であろう。対面形式で作業を行うことの重要性がここからも見てとれる。一方、政策学部生の学びは、異文化との触れ合いや友達作りにとどまる傾向にあった。政策学部生のサポートは聞き取り調査に

回答者として協力することと、調査結果をまとめた原稿の推敲であったが、前者に関しては、対面ではなく、LINE、メール、SurveyMonkey というオンライン調査ツールを通して調査が実施されたため学びにつながりにくかったと考えられる。後者に関しては、前期同様、実施期間が KCJS の学期末に重なったため、スケジュール調整が難しく、留学生 1 人のケースを除き、このサポートが行われなかったことが一要因と考えられる。

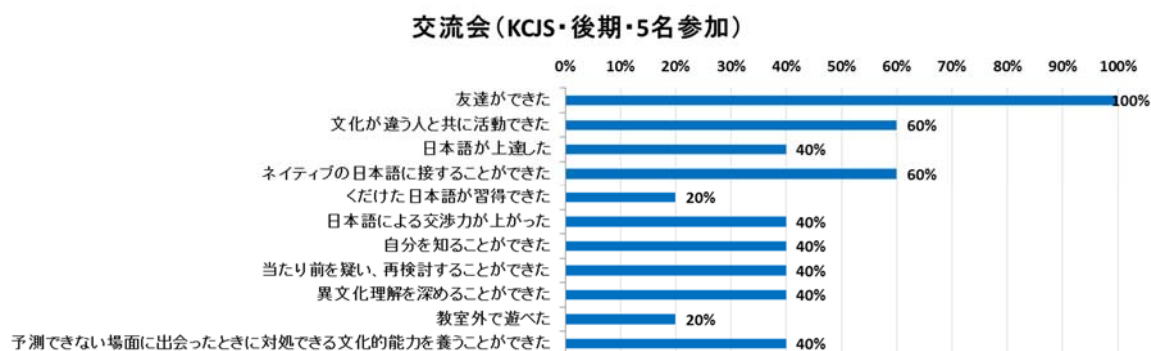
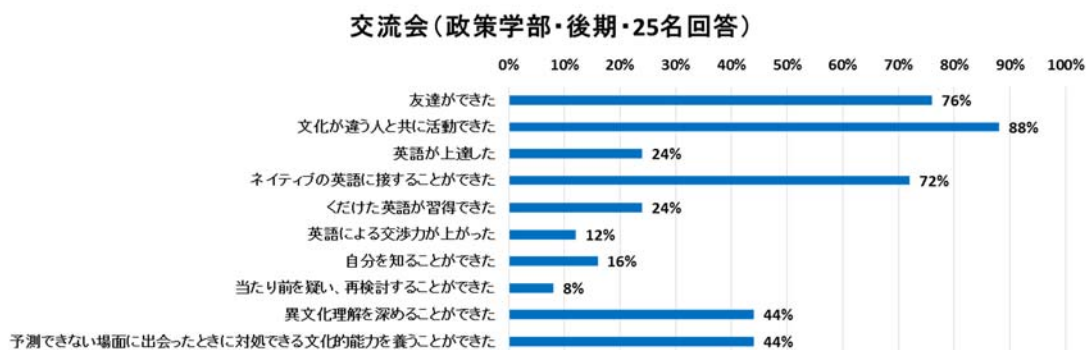
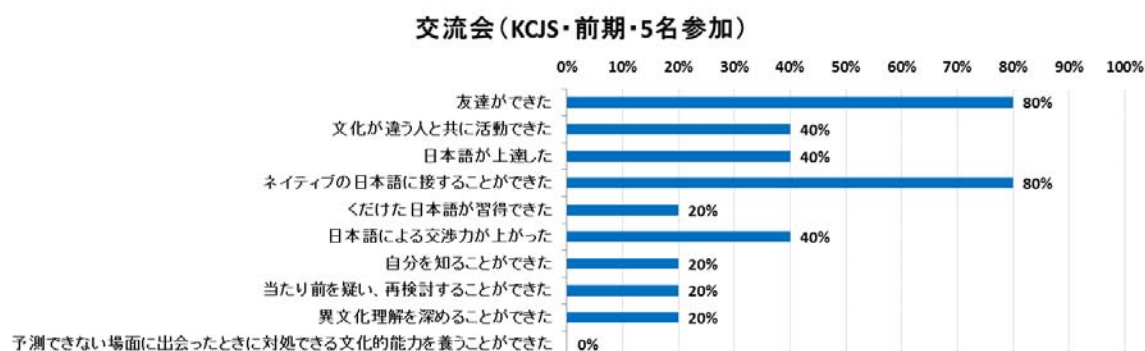
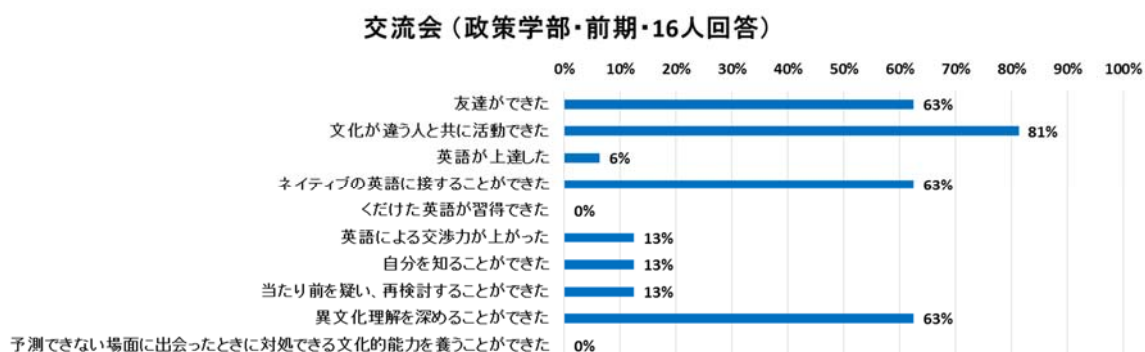
図表 10 助け合い（後期）の学び



3-3-3. インフォーマルな学び

交流会からの学びとしては、前期、後期ともに同様の傾向が見られた。KCJS 生、政策学部生ともに友達作り、さらにはネイティブの言語に触れる機会となったようである。日本という異文化環境に留学中である KCJS 生に比べ、このインフォーマルな学びの「仕掛け」は、より多くの政策学部生にとって、異文化と触れ合い、理解を深める場となったようである。

図表 11 交流会の学び（前期・後期）



また前期で「予測できない場面に出会ったときに対処できる文化的能力を養うことができた」を選択した参加者が、政策学部、KCJSともに0%であったことに対し、後期はそれぞれ44%、40%と高くなっている。これは、後期の交流会で学生が企画したプログラムに起因するものと考えられる。前期は、参加者全員でのゲームが主であったのに対し、後期は複数回少人数グループを作り、その中で自由におしゃべりを楽しむという企画であった。中には、話が続かなかつたり、話す話題を見つけるのに苦労したりするグループもあったことから、異文化環境において予測できない場面を経験する機会となったと考えられる。

4. 効果的な「学び合い」を創出するための課題

4-1. 前期のフィードバックに見る課題

4-1-1. 政策学部生のフィードバック

前期は「時間割が異なる」「忙しい時期が異なるから誘いにくい」「いつも忙しそう」など、時間的制約に関する指摘が多かった。これは、KCJSのサマータムに合わせて協働プロジェクトを実施したため、学び合いの期間が8週間と短かったことが主な要因であろう。

「仕掛け」に関するフィードバックとしては、交流会の頻度を上げてほしいという声があった。また「授業外でもつながりがもてるようなアイデアがほしい」という、お膳立てを期待する声もきかれた。教員側では、学期始めに出会いの場を提供すれば自然と交流が生まれ、友達関係に発展すると期待していたが、実際のところはなかなか難しいようである。

授業運営上のフィードバックとしては、使用言語を予め指定し、英語、もしくは日本語だけを使ってコミュニケーションを行う時間を設けてほしかったという声があった。

4-1-2. KCJS生のフィードバック

政策学部生同様、KCJS生からも、時間的な問題が多く挙げられた。お互いに忙しいため、交流だけでなく、課題のピア・エディティングも教員が期待したほど進まなかったようである。特にピア・エディティングは、実施時期が双方の学期末に重なったため、スケジュール調整が余計難しかったようだ。

また、交流会の回数と内容の見直しを求める声も多かった。KCJSのサマータム開始直後、協働を予定していた岡田・中村クラス以外の学生にも広く呼び掛け、交流会1回開催した。これに対し「1回では足りない。せめて2回で、2回目は自分のグループと交流したかった」「1回では名前が覚えられないので気まずい。誰が自分のグループのメンバーかも分からない。少なくとも2回はやった方がいい」というフィードバックがあった。この発言から、教員の意図に反して、交流会がプロジェクトのメンバーと知り合い、協働を円滑に進めるための顔合わせとして機能していなかったことが分かる。「お互いに対する信頼感がないと、発表の評価をしたり、発表後に内容に関して質問しにくい」と、心的負担に言及する学生もいた。交流会の質的な見直しは、心的負担の軽減策としても有効に作用すると考えられる。

KCJS生のフィードバックは、授業運営や作業の内容に関して非常に手厳しくも、建設的なものが多かった。留学中のKCJS生は、常時日本人との関係性の中に身をおいているため、ただ単に政策学部生と接するだけでは満足せず、より意義深い関わりを求める傾向にあるようである。

問題点としては、協働することの目的や目標が不明瞭だったという意義付けの共有不足が挙げられた。また「それぞれの目的のために、互いに力を貸し合う学び」という仕掛けにおいて、自分の役割が何なのか、どのようなインプットをどこまで期待されているのかわからず困ったという指摘があった。さらに、協働の課題が中途半端で達成感がないという感想もあった。英語によるポリシーメモの発表の準備を手伝う課題で、政策学部生の準備が不十分で、作業を通じてお互いに学び合えるような活動にはならなかったようだ。KCJS生は、実りある協働の経験を求めており、そのためには綿密な準備が必要だと改めて自覚した。双方に「学び」が起こり得るような場作り、プログラム作りを事前にしっかりした上で確実に実施することが不可欠であることが分かった。

4-2. 前期のフィードバックに基づき後期に行った改善

心理的負担を軽減し、仲間意識を芽生えさせ、責任持って助け合いができるようにするには、一学期を通じ毎回同じグループで活動をさせることが有益と考え、第1回の合同授業時から3つの小グループに分かれて活動を行わせた。その際、アイスブレイクとして自然と盛り上がるゲームを採用し、お互いに知り合い、緊張がほぐれてから課題をさせるよう工夫した。さらに、第1回目、第2回目合同授業後、同志社大学新町キャンパスの食堂で夕食会を設け、グループごとに歓談させた。

また、学期始めに、協働プロジェクトの趣旨と目標、課題、その流れとおおまかな予定をより丁寧に説明し、意義付けと目標・目的・役割の明確化を図った。その上、岡田が担当科目の概要、政策学部生の課題、そしてその課題を遂行する上で KCJS 生に求めるサポートを、直接 KCJS 生に説明した。

さらに「それぞれの目的のために、互いに力を貸し合う学び」という仕掛けがうまく機能し、達成感のある協働作業になるよう、現実的なスケジュールを組み、双方がサポートを行ったものが成果物としてきちんと形に残るようにした。具体的には、まず“Tropical Gangsters”の読解と要約の練習を岡田クラスで行った。その上で3つのグループに1章ずつ自習を課し、各グループによる要約の発表日を決め、それに即して KCJS 生のサポート期間を設定し、確実に有益なサポートが行えるように図った。一方、KCJS 生には、プロジェクトの一環として聞き取り調査を課すことで、政策学部生に回答者として関わってもらえるよう仕向けた。

4-3. 改善の結果

前期のプロジェクト期間が8週間と短期間だったのに対し、後期は3ヶ月だったことも有効に作用し、前述の改善からいくつかポジティブな結果が見られた。

前期は「時間がなくて会えない」もしくは「メールでのやり取りしかなかった」という声が多かったが、後期は、「それぞれの目的のために、互いに力を貸し合う学び」という仕掛けで KCJS 生がサポートを行った際、全グループがメールや LINE でなく、実際に顔を合わせて作業したと回答した。しかも、3グループ中2つが自主的に1回以上会って作業をしていた。要約の発表日前の一週間を KCJS 生のサポート期間とし、KCJS の週間スケジュールに明記し、かつ中村が授業で毎日進捗報告をさせたのが功を奏したと考えられる。

KCJS の期末発表には、政策学部生 12 名が任意で参加し、質疑応答など、積極的に発言した（前期は 0 名）。また、合同授業や助け合いの後、食事を共にしたり、観光するなど、自然な交流に繋がったケースも見られた。

「“Tropical Gangsters”のサポートが面白く、チャレンジのある課題で、作業を手伝うことから学びがあり、達成感があった」「自分のプロジェクトであるかのように真摯にサポートをしてくれたことに感激した」という声が KCJS 生から聞かれ、「それぞれの目的のために、互いに力を貸し合う学び」の仕掛けが、前期よりはうまく機能したと評価できよう。

4-4. 後期のフィードバックに見られる課題

4-4-1. 政策学部生のフィードバック

後期は、一緒に授業を受けるだけではなく、国際開発や国際協力など具体的な内容でディスカッションしたかったという声が多かった。これは、「それぞれの目的のために、互いに力を貸し合う学び」の仕掛けで“Tropical Gangsters”というアフリカでの国際協力活動に関する文献を扱ったことが作用していると思われる。また、職人の話を聞く受け身の授業が多かったため、積極的に参加する活動や少人数での活動を要望する声も多かった。

「インフォーマルな学び」の「仕掛け」へのコメントとしては、前期に引き続き「交流会の頻度を多くしてほしい」「時間を長くしてほしい」という要望があった一方で、交流会より少人数制の課外活動の方が、より深い交流ができるという意見があった。12月16日に行った茶道のフィールドワークに関する感想だと思われる。

授業運営上のフィードバックとしては、前期同様「使用言語を指定してほしい」「英語、もしくは日本語だけを使ってコミュニケーションを行う時間を設けてほしい」「日本人は英語で、留学生は日本語で話すのではなく、時間帯で使用言語を設定してほしい」という声があった。

4-4-2. KCJS生のフィードバック

政策学部生同様、KCJS生からも「大きなグループでは知り合えないので、小さなグループで話したい」「ゲームをする代わりに、小さいグループでアメリカや日本の国際関係のテーマで話し合うというような知的な交流をしたい」というように、交流会の内容の見直しを求める声が多く聞かれた。また「政策-KCJS全体の交流会でなく、協働プロジェクトを行う学生のみ参加する交流会をしてほしい」という声もあった。

前述の通り、後期は「それぞれの目的のために、互いに力を貸し合う学び」という仕掛けにおいて、KCJS生の政策学部生に対するサポートは成功したが、その一方で、政策学部生のKCJS生に対するサポートは、前期同様、時間の制約により難しいケースもあった。KCJS生が政策学部生に聞き取り調査を行う際、実際に対面して行った学生は、5人中1人のみだった。他の3名は、時間がなく、LINEやオンライン調査でしたと回答、1人は他の大学生の友達に回答してもらったと答えた。また、期末発表の原稿のピア・エディティングをしてもらった学生は1人のみだった。

4-5. 後期のフィードバックに基づいた今後の改善点

交流会は、単に頻度を増やすだけでなく、アイスブレイク的なゲームと知的な交流をバランスよく配置し、気まずさを払拭するだけでなく、お互いに知り合え、接点が見出せるような場作りが求められる。

また確実にピア・エディティングを実現させるためには、「授業時間を割いてクラスで作業をさせる」「ピア・エディティング活動の有無を成績に反映させる」「学生がお互いに推敲し合った文章をそのまま最終稿として評価する」など、思いきった手段をとる必要があるだろう。

さらにLINEやメールだけでなく、顔を合わせたコミュニケーションの創出もひと工夫必要である。例えば、合同授業を昼食前に設定することで、終了後にそのまま学食に流れるよう仕向けることなどが考えられる。

5. 通常授業内での実践に向けた10のヒント

同志社大学政策学部およびKCJSでの実践およびその検討から、以下の10点をヒントとして提言する。

スケジュールの違いには、妥協で対応する

このプロジェクトでは、同志社大学政策学部が日本の学年歴（4月～7月、10月～1月）、KCJSがアメリカの学年歴（夏6月～7月、秋9月～12月）に沿って授業を実施していた。学期始めや学期末の時期が異なるため、学生同士、教員同士のスケジュールを合わせることは容易ではない。またKCJSは午前中に日本語の授業、午後には専門科目の授業が入っているため（フォールセメスターのみ）、以下のいずれかの形で協働の時間を確保した。

- i. KCJS側で午前中の日本語の授業を休講にし、政策学部の授業に参加
- ii. 午前中に授業がない政策学部生がKCJSの日本語の授業に参加
- iii. 双方の学生が、正規の授業時間外に活動

学生、教員の双方に負担がかかる状況ではあるが、**お互いに妥協し合い、「学び合い」の時間を捻出することが鍵である。**

期待する「学び」に応じて「仕掛け」を選ぶ

本プロジェクトで実施した「仕掛け」からは、政策学部生、KCJS生、それぞれが異なる学びを得ていた。協働の場面を作り出すだけでなく、それぞれにどのような学びを期待するのかを教員側が明確に意識し、それに応じて適切な「仕掛け」を選択することが望ましい。3-3「『仕掛け』別に見る学び」で報告した通り、目標言語での交渉力を高めたいのか、異文化理解を促進したいのか、当たり前を疑う場面を作り出したいのかにより、提供すべき「仕掛け」は異なってくる。また、それぞれの「仕掛け」による学びは、日本人学生と留学生で異なる場合が多いため、どの学びに焦点を当てるのか、担当教員による事前の判断が求められる。例えば日本人学生は、いずれの「仕掛け」においても異文化体験、異文化理解に関する学びを得る傾向にあるが、言語面での学びを期待する場合には、留学生とペアになり課題を助け合うピア・エディティングのような「仕掛け」が有効であることが、本プロジェクトから浮かび上がった。また留学生活自体が異文化環境となっている留学生は、いずれの「仕掛け」においても言語面での学びを得る傾向にあるが、自分が持つ価値観や当たり前と感じていることを再検討する機会を提供したい場合には、日本人学生との合同授業などの異文化環境の中で、具体的な異文化体験を話し合う場面を創り出すことが効果的であると考えられる。

複数回「交流会」を行い、その際、友達作りの時間と知的活動を織り交ぜる

交流会を学期始めに一度行えば、自然と交流が発展すると教員側は期待していたが、経験上なかなかそのようにはいかないようである。時間において、一学期に数回行うことが望ましい。2回目からは、企画・運営チームを募り、学生主導で行わせることも、学生に主体性を持たせる上で効果的である。最初の交流会では、アイスブレイクの時間を十分にとり、早々にお互いに打ち解けられるように図る。その上で、お互いに知り合って交友関係に発展し得るような場を設けることが望ましい。そのためには小さいグループに分けることが必須で、何度かグループをシャッフルし、色々な人と知り合えるように仕向けることが大切だ。また、各交流会において、アイスブレイク的な活動と知的な活動のバランスをよくすることも重要である。飲食をしながらの交流や、身体を動かすアイスブレイクは、心理的な壁をなくす上で効果的である。

共通の「目的」を創り出し、明確に提示する

いずれの仕掛けにおいても、何らかの共通の「目的」を設定し、活動を開始する前に学生と十分共有することが重要である。教員間のみならず、学生間でも各活動の目的と目標に関して共通認識を作ることで、その活動におけるそれぞれの役割が明らかとなり、満足度の高い活動が実現し、その活動を通すことでしか見えてこない言語・文化・異文化間コミュニケーションに関する学びが期待される。

達成感が感じられ、学びを実感できる活動を創り出す

留学生は目標文化にいるため、目標言語を使用する機会は日常的にふんだんにある。従って、日本人学生と共に達成感のある活動に従事することを求める傾向が強い。そのような活動を創出するには、**現実的な計画と綿密な準備が不可欠**である。例えば、留学生が日本人学生の英語の文章の内容理解を助けるという活動であれば、まず、日本人学生、留学生双方に向けて、どのような手順でどんな点に留意して課題を進めるべきかの指導が必要である。また、双方の学生にとって実現可能なスケジュールを組み、無理のないステップで準備をさせたい。そうすることで、助ける側は自分の役割を全うことができ、学びを得、達成感を味わうことができる。同時に、助けてもらう側も、自分の理解度を客観的に把握でき、学びに繋がる。

学期を通してメンバーを固定し、心的負担の軽減とコミットメントの強化する

いずれの「仕掛け」においても、学期始めに小グループに分け、**学期を通して同じメンバーで活動**することが望ましい。小さいグループに分けることで知り合いやすくなり、早い段階で緊張がほぐれ、心的負担の軽減に繋がる。また、グループ意識が芽生え、お互いを助け合おうとするコミットメントが強くなる。交流会で出会い、友情を育みながら、合同授業で共通の体験をし、ピア・エディティングなどでお互いを助け合うという流れが理想的である。

場面ごとに、使用する言語を特定する

合同授業や交流会、ピア・エディティング等、いずれの仕掛けにおいても、場面ごとに使用言語（日本語・英語）を特定することが重要である。留学生は日本語を、日本人学生は英語を上達させたいという意欲を持っているが、一方の語学力が高い場合、そちらの言語に頼り切ってしまうこともある。**教員側から使用する言語を特定**することで、バランスよく両言語を用いた「学び合い」を促進することができると考えられる。

学びの創出には、対面による作業を義務づける

今日の大学生は物心ついた時から携帯電話やパソコン、インターネットのある生活環境で育ってきた世代であるため、ややもするとメールやLINEなどを通じた交流に偏りがちである。しかしながら、学びの分析からも明らかになったように、対面で作業をすることは学びの創出には不可欠である。対面での作業を義務づけたり、授業内で作業の時間をとるなどの徹底化が望ましい。

学生の主体性に頼りきらない

事後アンケートから、交流会や合同授業の際、自主的にクラス外で会う約束を取り付けた学生の方が少ないことがわかった。助け合いのスケジュールなどをあらかじめ教員側で組み、かつ、進捗報告を密にさせることが助け合い活動の成功の鍵である。また、学期始めに、メールを毎日チェックし、時間厳守をするよう指導し、ドタキャン、無断欠席をしないよう指導することが不可欠だ。ピア・エディティングなどの助け合い活動は、学期末の忙しい時期に重なるため、学生任せでは時間切れになってしまうことが多い。助け合い活動を確実に遂行させるためには、その活動自体を評価対象にしたり、互いに推敲し合った原稿に成績をつけるなど、教員による介入が必要である。

授業外での face-to-face の交流を促進する

日本人学生と留学生は、双方異なるスケジュールで動いているため、ついメールやLINEなど、易きに流れがちだ。特に学期末のような忙しい時期になると、ますます対面する機会は自然に生まれにくくなる。しかしながら、物理的に会っていれば、たとえ忙しい時期でも、その流れで授業外の交流に繋がる可能性が高い。助け合いを、必ず対面で行うことを義務づけたり、自然と食事やお茶に流れるような時間帯に合同授業などを設定するのも一案であると言えよう。

謝辞

このプロジェクトは、様々な方々のご協力の下に実施することができました。
皆様に感謝申し上げます（順不同）。

参加してくれた学生の皆さん（同志社大学政策学部・京都アメリカ大学コンソーシアム）

取材やインタビュー、ゲストスピーカーとしてご協力くださった職人の皆さま
リンゼイ四倉元所長、トーマス・メイソン所長、ショア扶左子さん、KCJSの先生方
（前）同志社大学政策学部 PBL 推進室・川北泰伸先生

同志社大学政策学部 PBL 推進室・同志社大学総合政策科学研究科 橋本圭多さん

同志社大学政策学部 島田顕啓さん、塩路和義さん、齋藤沙樹さん、高野裕美さん

上京区役所 地域力推進室出嶋恵理係長、浅田雅人さん、鳴橋明美さん

最後に、このプロジェクトを助成・支援してくださった
同志社大学学習支援・教育開発センターの皆さまに感謝申し上げます。

アカデミック・スキル 2-104

伝達 国際社会に通じるコミュニケーション・スキルを身に付けよう

月曜日 5 限（16:40-18:10）教室 R209

担当教員：岡田 彩（おかだ あや）

研究室：溪水館 208 号室

オフィスアワー：火曜日 10:00-12:00（予約不要）

メール：aokada@mail.doshisha.ac.jp

電話：075-251-3564

Welcome to the world of international communication!

「来週月曜日、アメリカから来る先生に、この間のレポートの内容をプレゼンしてほしい」
そんなリクエストを受けたら、皆さんはすぐに対応できる自信がありますか？

一番の問題は、語学力ではありません。どんなに外国語を堪能に話せたとしても、国際社会で真に戦える人材となれるわけではありません。またネイティブと同じように外国語を話せたとしても、内容に説得力がなければ、有意義なプレゼンテーションはできません。鍵となるのは、どのような順番でどのような情報を提示して主張を展開するか、どのような姿勢で対話するかなど、様々な要素が組み合わさって、初めて効果的なコミュニケーションが可能となります。

この授業では、以下三点を通じて、国際社会に対応できる議論の組み立て方、主張の見せ方を学びます。

第一に、Stephen E. Toulmin の argumentation model から「議論の組み立て方」を学びます。相手に説得力を持って伝わる「議論」に求められる様々な要素を学びます。

第二に、政策トピックスをポリシーメモにまとめます。ポリシーメモとは、ある政策の概要、背景、論争点、主張を簡潔にまとめた短い文書です。Brookings Institution や NGO による Policy Brief などの事例を元に、主張や議論を簡潔かつ分かりやすくまとめるコツを学びます。ここで養われる論理的構成力は、レポートや論文をはじめ、様々な仕事で求められる文章、プレゼンテーションに応用できる優れたものです。

第三に、ポリシーメモにまとめた内容を、英語でプレゼンテーションします。オーディエンスの前に立って原稿を読むだけのプレゼンテーションではなく、パワーポイントなどのツールを効果的に使い、相手に主張が明確に伝わるプレゼンテーションを目指します。

• 講義の目標

国際社会に通じるコミュニケーション・スキルとは何かを理解し、実践に移すことができる。

- 各回の内容（進捗状況や KCJS とのコラボレーションにより、変更する可能性があります）

	日時	内容	授業時間外での学習
1	4/7	効果的なコミュニケーションとは	
2	4/14	Present Yourself!	プレゼンテーションの準備
3	4/21	議論の組み立て方① Toulmin's argumentation model	テキストの予習
4	4/28	議論の組み立て方② Toulmin's argumentation model	テキストの予習
5	5/12	議論の組み立て方③ Toulmin's argumentation model	テキストの予習 政策トピックスのテーマを決定
6	5/19	主張の見せ方① 文章でまとめる	テキストの予習
7	5/26	主張の見せ方② 口頭で発表する	
8	6/2	グループ・エクササイズ	テキストの予習
9	6/9	KCJS 合同セッション	
10	6/16	グループ・エクササイズ (and/or KCJS とのコラボレーション)	
11	6/23	グループ・エクササイズ (and/or KCJS とのコラボレーション)	
12	6/30	グループ・エクササイズ (and/or KCJS とのコラボレーション)	
13	7/7	個人プレゼンテーション①	ポリシーメモの作成 プレゼンテーションの準備
14	7/14	個人プレゼンテーション②	ポリシーメモの作成 プレゼンテーションの準備
15	7/21	ポリシーメモ提出（おつかれ会！）	ポリシーメモの作成

* この授業では、京都アメリカ大学コンソーシアム（Kyoto Consortium for Japanese Studies、通称 KCJS）を通じて、アメリカから日本の短期留学している学生とのコラボレーション（交流会、職人さんへの取材補助、ピア・エディティング）を予定しています。参加を希望する人は、授業時間外の活動が求められる場合もありますので、予めご了承ください。KCJS に関する詳細は、<http://www.kcjs.jp/>を参照すること。

- 課題

各自関心のある政策トピックスに関連する主張を選び、英語でのポリシーメモ（A4・4枚以内）とパワーポイントを用いたプレゼンテーション（一人5分～10分の予定）で発表します。

締切	課題の内容
5月12日（月）正午	個人プロジェクトのテーマをメールにて提出
7月7日・14日	個人プレゼンテーション
7月21日 授業時	ポリシーメモ提出

- 成績評価基準

以下4つの項目を、100点満点で換算します。

授業への出席	10%	3回欠席で5点減点 * 正当な理由がある場合には、 講義当日正午まで にメールにて連絡すること
授業内エクササイズへの参加	30%	議論への積極的な参加
ポリシーメモ (個人プロジェクト)	30%	論理的・一貫性・説得力・分かりやすさ・オリジナリティなど
プレゼンテーション (個人プロジェクト)	30%	論理的・一貫性・説得力・分かりやすさ・オリジナリティなど

- Student Assistant (SA)

城 彩花さん (しろ あやか) さん (政策学部3年生)

bpm0275@mail3.doshisha.ac.jp

- テキスト

Toulmin, Stephen. (1984). *An Introduction to Reasoning Second Edition*. (Macmillan, 1984).
該当部分を授業内で配布します。

- 参考文献

スティーヴン・トゥールミン 『議論の技法』 (東京図書、2011) ISBN:978-4489020940

アカデミック・スキル1（11）

読解：国際協力・開発に関わる意味を考えよう

Instructor: Aya Okada

Email: aokada@mail.doshisha.ac.jp

Phone: 075-251-3564

Office Hour: Tuesday 10:00-12:00 (no need to make appointments)

Monday 16:40-18:10

Room: R209

Office: Keisuikan #208



According to the latest report by the United Nations, 6.6 million children died before reaching their fifth birthday in 2012. 162 million young children are suffering from chronic under-nutrition, and 58 million children are unable to receive primary education. 781 million adults and 126 million youth are not able to read or write, and more than 60 percent of them are women¹.

International development is a global effort to change and improve lives of these people that suffer from poverty. How do we do so? Why? What is our objective? Who determines the objective of development? In this course, we will discuss these old, but new questions. The class will read together a novel based on a real story of a development practitioner's experience as a guide to think about dilemmas and questions that one face in engaging in development efforts.

- Course Objective

Students will be able to logically discuss dilemmas and questions that one face in engaging in international development.

¹ United Nations. (2014). *The Millennium Development Goals Report 2014*. Last Accessed on September 14, 2014 at <http://www.un.org/millenniumgoals/2014%20MDG%20report/MDG%202014%20English%20web.pdf>

- Class Topics (subject to change)

	Date	Topic
1	10/6	Introduction: Image of “Development”
2	10/13	No Class - Typhoon
3	10/20	Class with Students from the United States (KCJS Session)
4	10/27	Tropical Gangsters: Preface and Chapter 1 (Aya)
5	11/3	Tropical Gangsters Chapter 2 (Group A)
6	11/10	Class with Students from the United States (KCJS Session)
7	11/17	Tropical Gangsters Chapter 3 (Group B)
	11/24	No Class (Aya at a conference)
8	12/1	Tropical Gangsters Chapter 4 (Group C)
9	12/8	Tropical Gangsters Chapter 5 (Group A)
10	12/15	Tropical Gangsters Chapter 6 (Group B)
11	12/22	Tropical Gangsters Chapter 7 first half (Group C)
12	1/5	Tropical Gangsters Chapter 7 latter half (Heejoo, Risa, Naori, Kaisei, Hikaru, Mako, Natsu, Dan- chan, Mana, and Shu)
13	1/19	Tropical Gangsters Chapter 8 (Yuno, Pengyu, Hiromi, Nao, Mai, Asa, Yuzu, and Aya)
14	1/21 Wednesday	Essay Editing Service at Aya’s Office (all day)
15	1/26	Images of “Development” Revisited

*Friday, January 16 - Lunch party with KCJS

- Assignments

- Short Summary

As a group, provide a summary on responsible chapters with 1) one sentence summary, 2) main points, 3) clarification questions, and 4) discussion questions.

- Final Essay

“What It Means to Engage in International Development”

Length: 4 or more double spaced pages (A4)

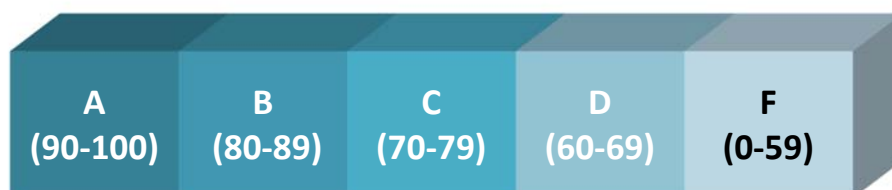
Language: English

(Aya will provide editing sessions for those writing in English.)

- Evaluation

Grades will be given according to the following three (plus one) aspects. Points will be added up to 100 percent.

Class participation	20%	Attendance and active participation in in-class discussions and exercises
Short summary	40%	Capturing the main point of the literature
Final Paper - Essay	40%	Clear, logical argument



- Textbook

Klitgaard, Robert. (1991). *Tropical Gangsters: One Man's Experience With Development And Decadence in Deepest Africa*. New York: Basic Books.

- Two copies are available at Imadegawa Library (332.4469||K9561)
- Another copy is available at Aya’s office (Keisuikan #208) during the weekly office hour.

- Email Notifications

As an additional way of communication, Aya may send you a message to your ActiveMail account. The information may be very important that might affect your grade, so make sure to check your emails frequently during the semester.

Collaborating with KCJS Students!

Our class will collaborate with students currently studying at Kyoto Consortium for Japanese Studies (KCJS) located in Doshisha.

You will be working with students normally studying at a university in the United States. They are staying in Kyoto between September and December to study Japanese and Japanese culture.

We will mainly work with 5 students studying with Itsuko Nakamura Sensei this semester.



- Lunch Time Party (**Friday, 10/17**)

12 students are invited to a party at Amherst House (stop by anytime between 11am-14pm). Light meal will be served. First Come, First Served – please let Aya know today if you are interested and available!

Take advantage of this opportunity to make new friends! Enjoy having lunch, dinner, or coffee together during their stay at Doshisha ☺

- Joint Session on Inter-Cultural Communication and Interview with Professionals

10/20 (Monday, during class)

“Examining the Experience of Inter-Cultural Communication I”

Self-introductions (icebreaking), Forming Groups, Discussions

Interview with a professional (guest speaker – subject to change)

KCJS students are working on examining a hypothesis on inter-cultural communication through Community Involvement Project (CIP). We will learn about their project, discuss the hypothesis together from our experience, and also hear the experience of a professional. We will also talk about Robert’s experience of inter-cultural communication from *Tropical Gangsters*.

11/10 (Monday, during class)

“Examining the Experience of Inter-Cultural Communication II”

Interview with a professional (guest speaker – subject to change)

- Helping Each Other Outside of Class

KCJS students will help you go through the chapter from *Tropical Gangsters* for your group presentation on 11/3, 11/17, 12/1! Nakamura-Sensei and I will help form a group of Seiseku students and KCJS students for mutual help during the class on 10/20. Feel free to meet outside of class, or ask for help over e-mails.

Between 11/17 and 12/5, Seiseku students will help KCJS students help put together a final paper and presentation. KCJS students are writing an “ethnography” based on a hypothesis they develop on inter-cultural communication. This is a report of what they

examined in the field and their analysis. Please help KCJS students prepare reports using correct Japanese language.

In the **morning of 12/11 (Thursday)**, KCJS students will make a final presentation about their findings on inter-cultural communication. Those of you who are available, please join me in attending the session.

Your commitment to collaboration with KCJS students will be reflected on your class participation points. For example, if you devote time outside of class for this collaboration, I will make sure to add extra points.

Please note that this project is titled 「日本人学生と留学生の学び合い」 and is being funded by 同志社大学 学習支援・教育開発センター. From time to time, Nakamura-Sensei and I will ask you to participate in a questionnaire and also in oral interview about your experience in the project.

付録③授業シラバス (KCJS・サマーターム)

KCJS サマープログラム 2014 上級日本語コース

<教員>

担任：中村 伊都子 in2008@columbia.edu

副担任：水野久里子 eauchampmarron@hotmail.com

講師室：扶桑館2階 203号室 電話：(075)251-4996

オフィスアワー：先生に都合を聞く

<授業時間と教室>

教室：205b (212で授業を行なう場合もあり)

授業時間：月～金 9:10-10:00、10:10-11:00、11:10-12:00

注意 課外活動、プロジェクト・ワークなどが授業時間外にあります。予定を把握しておいて下さい。

<教室>

扶桑館 212 (自習用) 使用可能時間： 月～金 午前 9:00-午後 7:55

扶桑館 204, 205ab 月～金 午前 9:00-午後 7:55

扶桑館101 月～金 午前9:00-午後2:40

<コースの目標と願い>

教室内での日本語学習は、アメリカにいてもできます。今、京都でしかできないこと。それは、これまでみなさんがコツコツ勉強して積み上げてきたものをコミュニケーションの目的で使い、相手と共に学びあうことです。

このコースは、人との関わりにおいて四技能（話す、聴く、読む、書く）を駆使することにより、総合的に日本語の運用能力を高め、日本文化理解を深めることを目的とします。そのために、「京都のプロフェッショナルに学ぶ」というプロジェクト・ワークをカリキュラムの柱にすえます。このプロジェクトで、みなさんは、伝統工芸の職人さん取材し、記事にまとめ、ホームページから発信します。また、同志社大学政策学部、岡田彩教授の担当クラスの学生との協働作業（交流会、遠足、取材、ピア・エディティング）により、学びを促進します。

2カ月は、あっという間です。「一期一会」をモットーに、不思議なご縁を大切に、みんなで京都での夏を120%楽しみましょう！

<コースの方法論>

なぜ、プロジェクト・ワークを？

みなさんは、「日本語を学ぶ」のではなく、「日本語で学ぶ」レベルに達しています。そこで、従来の教師主導型の講義ではなく、体験学習が有効だと考えました。インタビューという手法を用い情報を引き出し、編集、発信するという課題の遂行には、四技能（話す、聴く、読む、書く）を統合的に使うことが不可欠となるからです。例えば、取材前の下調べの段階では、読み書きが重要になります。取材時は、質問をし、相手の話を聴き、メモを取り、かつ、話が分からない時は、聞き返したり自分の理解が正しいか確認するなどの作業が必要になります。また、敬語の練習や訪問の際のマナーを学ぶいい機会にもなります。

相手から話を引き出す、傾聴する、得た情報を整理し文章に落としこむ、発信するというのは、生きていく上で欠かせないタスクです。その練習を授業の一環としてできるところが留学の醍醐味だと言えるでしょう。

なぜ、職人さんに取材を？

日本は創業200年以上の企業が世界で最も多いとされています（2013年の韓国銀行の調査によると、41カ国の合計5586社の内の3146社が日本に集中）。特に、京都は、伝統の技を継承してきた職人さんの宝庫です。

みなさんは日本研究の分野ぶんやに在るとはいえ、美術史の専門でない限り、伝統工芸でんとうこうげいの職人さんに取材をすることはまずないと思います。だからこそ、あえて職人さんを取材対象として選びました。住む世界が違う人と知り合うことは、自分自身を知り、当たり前だと思ってきたことや、握りしめてきた価値観を見直すことにもつながります。今回、取材を受け入れてくださる職人さんとは、一般の京都人もなかなか知り合う機会がありません。ましてや、仕事場におじゃまするなどそうそうありません。そんな方々が、仕事の手を止めて、留学生のみなさんの「外の視点」から学びたい、と快く取材を受け入れて下さいました。取材相手の方々も、みなさんとの交流を楽しみにしていらっしゃる、また、みなさんからのフィードバックやインプットを今後の制作活動いに活かしていこうと考えていらっやいます。「一期一会」をモットーに、学び合いを楽しんでください。

日本人学生との協働

もう一方の学び合いの相手は、現在「国際社会に通じるコミュニケーション・スキルを身につける」という授業を英語で取っている同志社大政策学部せいさくの学部生です。みなさんの取材に同行してくれる心強いパートナーです！ピア・エディティングも行います。文章をより伝わりやすいものにするため、policy memo と取材記事をお互いに読み、アドバイスをし合います。

これらの協働作業を通して、異文化間コミュニケーション、また、日本語と英語という言語世界そごほうについて双方に気づきや発見があることを願います。

フィードバックの重要性

前半は、プロジェクト中心で授業を進めて行きますが、中間以降は、できる限りみなさんの興味・関心をテーマとして扱いたいと思います。とにかく、コミュニケーションを密にしましょう。クラスについての要望や問題があったら、すぐに、オープンに話してください。それがこの2カ月を有意義な時間ゆういぎにするための鍵かぎです。私達もみなさんから色々学ぶのを楽しみにしています！

<詳しい学習目標>

1. 日本人のために作られた様々なジャンルのもの（新聞記事、エッセイ、小説、ニュース、映像作品など）が、理解できるようになる。
2. 日本語でのコミュニケーションにおいて、分からないことを質問したり、自分の理解が正しいかどうか確認したり、時には推測すいそくによって補おぎないながら、理解りかいを深められるようになる。
3. 詳しく説明したり、描写びようしゃしたり、説得力のある意見を述べたりできるようになる。
4. 習った文法表現を用いて、相手に伝わる文章を書けるようになる。
5. 相手や場面にあわせ、適切な話し方ができるようになる。
6. 日常語彙ごい、抽象語彙ちゆうしやうごいを増やす。
7. 『どんな時どう使う日本語表現文法 500』を使って、日本語能力試験 2・1 級の文法を学ぶ。
8. ニュース番組で今話題のニュースを理解し、それについて話せるようになる。
9. 『Kanji in Context』からの小テストで、漢語彙かんごいを増やす。
10. 教室外での活動を通して、日本文化や日本人の考え方にふれる。

<大切な日> *プロジェクト・ワークの流れ、締切しめきりは、別紙を参照さんしやうのこと。

1. 中間試験：6月26日（木） 1～2時間目 文法、読み、書き、単語
2. 期末試験：7月24日（木） 1～2時間目 文法、読み、書き、単語
3. 期末発表：7月25日（金） 1～2時間目

<政策学部との協働> *予定を入れないでください*

遠足：LUSH見学 6/13（金）3:00-4:30

交流会： 6 / 16 (月) 4:40-6:10

作業： 6 / 23、30、7 / 7、14 (いずれも月曜日) 4:40-6:10

<KCJS課外活動> *予定を入れないでください*

- 6 / 6 (金) 日本人学生との交流会 13:00-14:30 (@アーモスト・ゲストハウス)
- 6 / 9 ~ 12 (月~木) 小グループの体験型活動 午後1時間半~2時間 (6 / 5 12:00 までにサインアップ要)
- 6 / 20 (金) 祇園祭講演会 13:00-14:30 (@M3) <古文コースと合同>
- 6 / 27、28 (金、土) 奈良旅行
- 7 / 4 (金) 夕食 17:30- 長刀鉾囃子方練習会見学 19:30- <古文コースと合同>
- 7 / 11 (金) 和太鼓 13:30- @妙満寺 (左京区岩倉)
- 7 / 18 (金) 懐紙教室 13:10-14:30

<小テスト>

1. 漢字：火~金 (1時間目に授業内で受ける) 『Kanji in Context』 から出題
「第95回~第106回」(第4水準)と「第117回~第122回」(第5水準)の2種類から、好きな方を選択
「95~104」は2セクションずつ、「171~121」は1セクションずつ進める
注意：◇、**特**、**歴**マークのものは出ない
フォーマット：1日目：意味を英語で書く
2日目：読み方をひらがなで書く
3日目：ひらがなを漢字に直して例文中の () に入れる
2. 漢字復習：漢字小テストの問題から、間違いやすいものが出題される
3. 単語：月曜日 クラスで読んだ読み物等から、みんなが覚えたい単語を選ぶ

<注意>

- ①日本語だけルール：扶桑館ふそうかんの中では、日本語で話すこと。
注意 日本語以外で話していると注意を受けます。注意が多い学生は、成績せいせきが1ランク下がります。
- ②教材管理：プリント教材が多いため、100円ショップでフォルダーを買って、整理すること。
- ③宿題：提出日までに出すこと。遅れた場合、チェックはするが、成績はもらえない。
- ④欠席：休む時は必ずその日の担当教員に電話かメールで連絡すること。
- ⑤遅刻：2回遅刻したら欠席1回となって、15分以上の遅刻は欠席となる。
- ⑥試験：やむをえない理由をのぞき、受けられなかった試験を後で受けることはできない。
- ⑦小テスト：どんな理由であっても、決められた日以外に受けることはできない (ただし、一番点数の低いテストをのぞいて、最終成績がつく。)
- ⑧授業中に食べてはいけない。

<成績>

中間・期末試験	10%
宿題	15%
出席/授業の準備、積極性	15%
小テスト	10%
プロジェクト・ワーク	50% (取材15%、記事15%、協働10%、期末発表10%)
100-94.0 A	76.9-73.0 C
93.9-90.0 A-	72.9-70.0 C-
89.9-87.0 B+	69.9-67.0 D+
86.9-83.0 B	66.9-63.0 D
82.9-80.0 B-	62.9-60.0 D-
79.9-77.0 C+	59.9 F

KCJS26 2014 年秋学期 日本語 C-2 クラス

担任 (coordinating instructor) : 中村伊都子

オフィス/電話番号/メール: F203 (扶桑館) /075-251-4996/in2008@columbia.edu

オフィスアワー: 必要に応じて (事前に連絡すること)

副担任 (Sub-instructor) : 西俣美由紀 mf2249@columbia.edu

授業時間: 月~金 9:00-10:00 & 10:10-11:00

教室: F213

<KCJS 全体の目標>

The objective of KCJS's Japanese Program is to enhance the student's communicative competence and to enable professional and personal interaction with members of Japanese society in ways that are culturally readily acceptable.

In particular, a KCJS student will come to:

1. Understand the intentions of others when Japanese is spoken;
2. Understand the intentions of others when written materials of various genres and media are presented;
3. Control the use of Japanese expressions, both spoken and written, in order to fit the socio-cultural settings and purposes of communication;
4. Expand the modes of communication used to include such genres as formal presentations, negotiations, projects, the organization of events, and their follow-up.

<このクラスの大きな目標と願い>

教室内での日本語学習は、アメリカにいてもできます。今、京都でしかできないこと。それは、これまでみなさんがコツコツ勉強して積み上げてきたものをコミュニケーションの目的で使い、相手と共に学びあうことです。

このクラスは、人との関わりにおいて四技能(話す、聴く、読む、書く)を駆使することにより、総合的に日本語の運用能力を高め、日本文化理解を深めることを目的とします。そのために、プロジェクト・ワークをカリキュラムの柱にすえます。いくつかプロジェクトの選択肢がありますが、どのプロジェクトにするかは、1週目のみなさんの様子を見て決めたいと思います。また、同志社大学政策学部、岡田彩先生の担当クラスの学生と協働(交流会、遠足、合同授業等)により、学びを促進します。

1学期は、あつという間です。「一期一会」をモットーに、不思議なご縁を大切に、みんなで京都での生活を120%楽しみましょう!

<大きな目標達成のための方法論>

- ①プロジェクト・ワーク
- ②地域参加型プロジェクト (Community Involvement Project)
- ③同志社大学政策学部、岡田彩先生の担当クラスの学生と協働
- ④課外活動: 様々な年齢層の日本人との教室外での交流
- ⑤ゲスト講師による講義: 読んだ内容と関連のあるテーマで日本語教師以外の日本人の話を聞く

<詳しい学習目標>

1. 日本人のために作られた様々なジャンルのもの(新聞記事、エッセイ、小説、ニュース、映像作品など)が、理解できるようになる。
2. 日本語でのコミュニケーションにおいて、分からないことを質問したり、自分の理解が正しいかどうか

- か確認したり、時には推測によって補いながら、理解を深められるようになる。
3. 詳しく説明したり、描写したり、説得力のある意見を述べたりできるようになる。
 4. 復習の必要性のある既習文法を復習し、正確に効果的に使えるようにする。
 5. 相手や場面にあわせ、適当な話し方ができるようになる。
 6. 日常語彙、抽象語彙を増やす。
 7. 日本語能力試験3・2級の文法を学び、正確に効果的に使えるようになる。
 8. 『Kanji in Context』第3水準からの小テストで、漢語彙を増やし、書ける漢字、読める漢字を増やす。
 9. 独学のストラテジーを身につける。
 10. 教室外での活動を通して、日本文化や日本人の考え方にふれる。

<教材>

- プリント
- 『中級日本語文法要点整理ポイント20』
- 『Kanji in Context』

<小テスト>

1. ほぼ、毎日9時から9時10分の間にクラスで行なう。遅刻をしても時間の延長なし。
2. 漢字テスト：単語テストがない日は、毎日「意味」と「読み&書き」の小テストを受ける。
『Kanji in Context』から出題される。ただし、◇、**特**、**歴**マークのものは出ない。
3. 漢字まとめテスト：漢字テストの3、4つ分から出題される。
4. 単語テスト：クラスで読んだ読み物から出題される

<コースでしなければならないこと、してはいけないこと>

1. 授業の前
 - 必ず予習する（読み物のわからないところに線を引く／言葉を調べる／音読できるように読めない漢字にふりがなをふり音読しておく等）
2. 授業中
 - 遅れて来ないこと。毎日9時から9時10分の間に小テストがある。遅刻をしても時間の延長なし。
 - 毎日、積極的に授業に参加する。
3. 授業の後
 - 授業で勉強したことを復習する。特に予習で分からなかったところ分かるようになったか、確認すること。
 - 教材をバインダーに整理する。
4. 遅刻と欠席について
 - 遅刻と欠席は、授業ごとに数える。（例 1日休んだら2回欠席）
 - 欠席した場合、出席点、参加点共に0点になる。（ただし、学期末に点数の低い順から6回分の参加点を落として最終の参加点をつける。）
 - 1分でも遅れたら、その授業は「遅刻」の扱いになる。
 - 20分未満の遅刻は、その授業の参加点を半分、20分以上遅れたら、0点。
 - 授業に三回遅れたら、「授業を一回休んだ」ことになる。
 - 授業を七回以上休んだ場合は、担任と所長に書面で理由を説明すること。
5. 学生としての責任

- いつでもどこでも誰とでも日本語を使う。扶桑館の中で英語を使わない（日本語だけルール）。使えば使うほど、日本語が上手になります！
- 書くとき、話すときに、習ったことを積極的に使う。
- くせ（発音、漢字の書き方、文法など）を直す。何度も同じ間違いをしないように注意する。
- しめきりまでに宿題を出す。遅れた場合はチェックしますが、成績には入れません。
- どうしても休まなければならない場合は、必ず電話かメールで担任に連絡する。休んだ日の小テストは後で受けることはできない。試験は、やむおえない事情で欠席した場合だけ、後で受けることができる。
- 休んだ日の授業の内容や次の日の宿題などについて、自分でクラスメート／先生に聞く。
- 教室では食べ物を食べない。
- 授業中、携帯電話の電源は切っておく。

<成績うちわけ>

授業 (35%)	出席	10%
	参加（準備、積極性）	5%
	宿題	20%
小テスト・試験 (25%)	小テスト（漢字、単語）	10%
	試験1、2、3	15%
プロジェクト (40%)	地域参加型プロジェクト（CIP）	10%
	プロジェクト	25%
	期末発表	5%

100 - 94.0 A	93.9 - 90.0 A-	89.9 - 87.0 B+
86.9 - 83.0 B	82.9 - 80.0 B-	79.9 - 77.0 C+
76.9 - 73.0 C	72.9 - 70.0 C-	69.9 - 67.0 D+
66.9 - 63.0 D	62.9 - 60.0 D-	59.9 - F

<教室使用可能時間>

扶桑館 212, 205ab	月～金	午前 9:00-午後 7:55
扶桑館 204, 213	月～金	午前 9:00-午後 12:30
扶桑館 214	月～金	午前 9:00-午後 12:00

<最後に大切なお願い>

フィードバックは、人間関係において最も重要な要素です。お互いコミュニケーションを密にしましょう。困っていること、クラスについての要望や問題があったら、すぐに、オープンに話してください。それが今学期を有意義な時間にするための鍵です。私もみなさんから色々学ぶのを楽しみにしています！

KCJS26 2014 年秋学期 日本語 C-2 クラス Addendum

プロジェクト・ワーク：「異文化間コミュニケーションの学びを共有する」

地域参加型プロジェクト（Community Involvement Project）の活動場所は、エスノグラフィーの「現場（field）」です。「現場」というのは、人々が何かを行なっている場のことです。エスノグラフィーは、その現場がどう成り立っているかを内側から理解するための方法です。

エスノグラフィー研究を通して、その現場の規則性が色々見えてくるはずですが、日本語のプロジェクトとしては、特に「異文化間コミュニケーション」に焦点をあてて、自分が実践から得た学びを KCJS やホーム校のクラスメートや後輩向けに発信します。

<課題>

1. 期末レポートを日本語で書く

テーマ：異文化間コミュニケーションの現場での体験から得た学び

（「広く浅く」ではなく「狭く深く」）

- ・これまで CIP での観察に基づいてたてた仮説から、「言語」あるいは「文化」に関する仮説を 1 つ選ぶ。観察を続け、それについてまとめる。

- ・レポートの内容

①仮説

②具体例

③色々な日本人の意見（政策学部の学生、ホストファミリー、友達など）

④仮説に基づいた学び

2. 同志社大学政策学部、岡田彩先生の担当クラスの学生との協働学習

①ゲスト講師による講義：異文化・多文化の現場で仕事をする方に経験談を聞く

10月20日、11月10日

②目標言語・文化の学びをサポートし合う

<KCJS 生→政策学部生>英語のエッセイの内容を分かりやすく発表するためにサポートする

- ・“Tropical Gangsters” の 1 章を読んで、自分のグループが分からなかったところの質問に答える
- ・担当の章のまとめを書く時のサポート（要点が取れているか、英語の見直し）
- ・メールのやり取りやキャンパスで会う
- ・ただ直すだけでなく、説明もしてあげること

<政策学部生→KCJS 生>

- ・（グループの人全員）仮説が正しいかどうか検証するためにインフォーマントになってもらう
- ・（グループの中の 1 人）期末レポートの読み手になってもらう（日本語の見直し）

3. 期末レポートに基づいて、日本語で発表をする

<プロジェクトのだいたいの流れ>

wk			1	2	その他	助け合い(クラス外)	
5	10/6	M					
	10/7	T					
	10/8	W		CIP			
	10/9	Th					
	10/10	F			事前アンケート ^{はいふ} 配布		
6	10/13	M	祝日				
	10/14	T	CIP		事前アンケート ^{ていしゆつ} 提出		
	10/15	W	岡田授業				
	10/16	Th					
	10/17	F	試験1		交流会 11:00-2:00 クラスがある人は、1時まで		
	7	10/20	M			合同授業 16:40-18:10 + 晩ご飯	
		10/21	T				
10/22		W	CIP				
10/23		Th					
10/24		F	レポートの テーマ提出			CIP Blog 1 締め切り	
8	10/27	M				グループ A のサポート	
	10/28	T				↓	
	10/29	W		CIP		↓	
	10/30	Th				↓	
	10/31	F					
	秋休み(11/1-9)			(11/3 グループ A 発表)			
9	11/10	M			合同授業 16:40-18:10		
	11/11	T				グループ B のサポート	
	11/12	W			CIP	↓	
	11/13	Th				↓	
	11/14	F			試験2	↓	
10	11/17	M	アウトライン 提出		(グループ B 発表)	政策の学生による サポート グループ C のサポート	
	11/18	T				↓	
	11/19	W		CIP		↓	
	11/20	Th				↓	
	11/21	F				↓	
	11	11/24	M				政策の学生による サポート
11/25		T				↓	
11/26		W		CIP		↓	
11/27		Th				↓	
11/28		F	原稿下書き提出			↓	

12	12/1	M			(グループC発表)	↓
	12/2	T				↓
	12/3	W		CIP		↓
	12/4	Th				↓
	12/5	F			CIP Blog 2 締め切り	↓
13 & 14	12/8	M	最終原稿提出			
	12/9	T	個人指導			
	12/10	W	リハーサル			
	12/11	Th	発表会		事後アンケート	
	12/12	F	Exit 試験		事後アンケート	
	12/15	M	試験3		修了式	

せいせき
 <成績うちわけ>

授業 (35%)	出席	10%
	参加 (準備、 <small>せつきよくせい</small> 積極性)	5%
	宿題	20%
小テスト・試験 (25%)	小テスト (漢字、単語)	10%
	試験 1、2、3	15%
プロジェクト (40%)	地域参加型プロジェクト (CIP)	10%
	プロジェクト	25%
	期末発表	5%

<プロジェクトの流れ>

week			1	2	その他	助け合い	
wk 5	10/6	M			事前アンケート回収		
	10/7	T					
	10/8	W		CIP			
	10/9	Th					
	10/10	F					
wk 6	10/13	M	祝日				
	10/14	T					
	10/15	W		岡田授業			
	10/16	Th					
	10/17	F	試験1				
wk 7	10/20	M			合同授業		
	10/21	T					
	10/22	W		CIP			
	10/23	Th					
	10/24	F					
wk 8	10/27	M			(グループ B 発表)		
	10/28	T					
	10/29	W		CIP			
	10/30	Th					
	10/31	F					
秋休み(11/1-9)							
wk 9	11/10	M			(グループ C 発表)		
	11/11	T					
	11/12	W		CIP			
	11/13	Th					
	11/14	F					
wk 10	11/17	M			合同授業		
	11/18	T					
	11/19	W		CIP			
	11/20	Th					
	11/21	F	試験2				
wk 11	11/24	M					
	11/25	T					
	11/26	W		CIP			
	11/27	Th					
	11/28	F					
wk 12	12/1	M					
	12/2	T					

	12/3	W		CIP		
	12/4	Th				
	12/5	F				
wk 13 & 14	12/8	M	リハーサル	リハーサル		
	12/9	T				
	12/10	W	発表会	発表会		
	12/11	Th			事後アンケート	
	12/12	F	Exit 試験	Exit 試験	事後アンケート	
	12/15	M	試験3	試験3	修了式	

付録⑤ 取材プロジェクト「京都のプロフェッショナルに学ぶ」の流れ

	流れ	タスク	作業期間 締切日
①	何をどんな切り口から取材するかリサーチ&取材先を決める	<ul style="list-style-type: none"> 取材先の選択肢から、興味のあるところを見つける 取材先のホームページ、過去の記事を斜め読みする 資料がない場合、その仕事についてネットで調べる 	6/2 - 6/5
		《提出》《発表》取材のプロポーザル	6/5
②	下調べ	<ul style="list-style-type: none"> 取材するものについての予備知識を増やす 自分の興味を探る 取材する時に役に立ちそうな単語を増やす 	6/5 - 6/16
		《提出》《発表》取材テーマに関するリサーチ	6/9 & 6/12
③	顔合わせ	<ul style="list-style-type: none"> 取材先に挨拶に行く(自己紹介、おしゃべり) 取材の日時を調整する 所要時間: 1時間程度 * 教員の引率あり * 政策学部の協働パートナーも同行 	6/17 - 6/20
④	取材準備	<ul style="list-style-type: none"> 下調べを続ける(興味を探る、予備知識、単語を増やす) 取材のポイントを作る 必要であれば取材の日時調整をメールか電話でする * メールの場合は、橋本先生に見ていただく 	6/17 - 6/22
⑤	取材に行く	<ul style="list-style-type: none"> 取材をする(ICレコーダーで録音する) 写真を撮る 所要時間: 2時間~2時間半程度 * 政策学部の協働パートナーが同行 	6/23 - 6/26
⑥	お礼の手紙を書く		取材後
⑦	取材の振り返り・アウトラインを書く	<ul style="list-style-type: none"> 取材を振り返り、自分の興味をつきつめる(必要であれば、取材の録音を聴く) 政策学部の協働パートナーと取材内容の共有・確認をすることで理解を深める 記事のアウトラインを書く 	取材後~ 6/30
		《提出》《発表》記事のアウトライン	7/1
		《提出》記事のアウトライン書き直し	7/2

⑧	エビデンス集め	<ul style="list-style-type: none"> 記事を書く上で必要な情報を集める 取材の録音を聴く 必要なところは、文字おこしをする 足りない情報がある場合は、メールか電話で伺う 	7/1 – 7/10
⑨	記事を書き始める	<ul style="list-style-type: none"> 記事の下書きを書く 政策学部の協働パートナーとピア・エディティングをする 	7/3 – 7/10
		《提出》記事の下書き1	7/11
⑩	記事を書き直す	<ul style="list-style-type: none"> コメントを受けて、手直しをする 足りない情報がある場合は、メールか電話で伺う * 政策学部の協働パートナーに読者になってもらう 	7/14 – 7/15
		《提出》記事の下書き2	7/16
		《提出》最終稿	7/21
⑪	発表の準備をする	<ul style="list-style-type: none"> 発表原稿を書く パワーポイントのスライドを作る 発表の練習をする リハーサルをする 	7/18 – 7/24
		《提出》発表原稿&パワーポイント・スライド	7/21
		《提出》発表原稿&パワーポイント・スライドの最終版	7/24
⑫	クラスで発表する		7/25

付録⑥

合同授業 10月20日（月） 教案

場所：新町キャンパス 臨光館2階209教室

授業時間：16:40～18:10

来ていただく時間：16:35

16:40～16:45

①岡田先生のウェルカム・メッセージ（**英語と日本語**）と中村の簡単な挨拶、SAの自己紹介（5分）

16:45～17:00

②グループでのアイスブレイク（15分）

・自己紹介（**同志社生は英語、KCJS生は日本語**）

・同志社生がKCJSの学生の身辺調査をする（**同志社生は英語、KCJS生は日本語**）

・「意外な共通点コンテスト」メンバー全員に見られる共通点を探すべく質問をし合う。
意外な共通点を3つ探し出す

17:00～17:10

③全体でのアイスブレイク（10分）

・同志社生が、**英語で**自分のグループのKCJS生について詳しく紹介（**同志社生がメンバーのKCJS生について一点ずつ紹介する。必ず全員が一回は発言するようにする。その際、同志社生は、自分の名前、ニックネームを言う。**）

・「意外な共通点コンテスト」KCJS生が、**日本語で**自分のグループのメンバーの意外な共通点を発表。最も意外性が高かったグループに賞品？（**お菓子**）

17:10～17:15（**ここからはずっと日本語**）

④中谷さん自己紹介（5分）**パワーポイント使用**

・経歴

・あんじグループについて

・東アジア進出の取り組みについて

・問いの提示

①カンボジアに出店し、現地人を雇用してレストランを営業するにあたってどんなチャレンジがあったと思うか。

②それをどのように克服してきたと思うか。

③克服するためには何が不可欠だと思うか。

17:15~17:25

⑤グループでスキーマ作り（10分）

・中谷さんの2つの問いについて話し合う

・中谷さんに聞いてみたいことを挙げる

17:25~17:30

⑥全体で、グループで出てきたことを共有（5分）各グループ1分×3?

17:30~17:50

⑦中谷さんのお話（20分） **パワーポイント使用**

・カンボジア、シンガポールに出店し、現地人を雇用してレストランを営業するにあたってのチャレンジ。自分の「当たり前」が「当たり前」でなくなった出来事、異文化衝突の具体例

・それをどのように克服してきたか。

・克服するために大事なこと。

17:50~18:00

⑧グループで分からなかったところのケア（5分）

18:00~18:10

⑨質疑応答（10分）

付録⑦ 事前事後アンケートおよび聞き取り調査 実施概要

- ・事前事後アンケートの内容については、付録⑦～⑫参照。
- ・フォーカス・グループ・インタビューでの質問次項は、以下の通り。インタビュアーは、プロジェクト実施者ではなく、大学院生に依頼した。
 1. 政策学部とのコラボレーションにおいて、一番の学びは何でしたか。その理由も教えてください。
 2. どの仕掛けから最も学びを得たと感じましたか。
 3. 政策学部とのコラボレーションにおいて、一番印象に残ったことは何ですか。その理由も教えてください。
 4. 政策学部とのコラボレーションについて、こんなところを改善した方が良く、こんなプランがあったら良いのではないかなど、提案があれば教えてください。

春学期／サマーターム

KCJS	事前アンケート	2014年6月16日(月) メールで提出	提出者5名
	事後アンケート	2014年7月21日(月) メールで提出	提出者5名
	フォーカス グループ インタビュー	2014年7月22日(火) 11:10～12:10	参加者5名
政策学部 月曜クラス	事前アンケート	2014年6月16日(月) 授業内	提出者16名
	事後アンケート	2014年7月21日(月) 授業内	提出者17名
	フォーカス グループ インタビュー	2014年7月25日(金) 13:40～14:40	参加者9名
政策学部 金曜クラス	事前アンケート	2014年6月13日(金) 授業内	提出者17名
	事後アンケート	2014年7月25日(金) 授業内	提出者17名
	フォーカス グループ インタビュー	2014年7月28日(月) 16:40～18:00	参加者7名

秋学期／スプリングセメスター

KCJS	事前アンケート	2014年10月14日 メールで提出	提出者5名
	事後アンケート	2014年12月12日 メールで提出	提出者5名
	フォーカス グループ インタビュー	2014年12月10日(水) 11時～12時	参加者4名 (1名病欠)
政策学部 月曜クラス	事前アンケート	2014年10月27日(月) 授業内 ¹	提出者17名
	事後アンケート	2015年1月26日(金) 授業内	提出者16名
	フォーカス グループ インタビュー	2015年1月26日(月) 17時～18時	参加者18名
政策学部 金曜クラス	事前アンケート	2014年10月17日(金) 授業内	提出者17名
	事後アンケート	2015年1月23日(金) 授業内	提出者17名
	フォーカス グループ インタビュー	2015年1月30日(金) 13時10分～14時	参加者5名

¹交流会前に10月13日(月)に実施予定だったが、台風による休講となったため、急遽日程を変更して行った。

日本人学生と留学生の「学び合い」
事前アンケート ご協力をお願い

今学期の授業では、交流会や合同授業など、様々な形で「京都アメリカ大学コンソーシアム（通称 KCJS）」とコラボレーションしていきます。その経験から、同じキャンパスで学ぶ日本人学生と留学生が交流を深め、お互いから学び合うためには、どのような仕掛けが有効なのかを考えていきたいと思っています。より良い交流や学び合いを実現するためのヒントを得るために、皆さんの力を貸してください。

このアンケートは、学期終了時に行うアンケートと比較できるようにするため、記名式となっています。データ入力後、すぐに個人は特定できない形に加工しますので、安心して正直な気持ちを教えてください。

なお、このプロジェクトは同志社大学 学習支援・教育開発センターの助成を受けて行っています。

政策学部 岡田 彩
KCJS 中村 伊都子

日本人学生と留学生の「学び合い」
事前アンケート

お名前 _____

1. KCJS&政策学部のコラボレーションに期待することとして、該当するものを☑してください。(いくつでも)

- | | |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 友達を作る | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動すること |
| <input type="checkbox"/> 英語の上達 | <input type="checkbox"/> ネイティブの英語に接すること |
| <input type="checkbox"/> くれた英語の習得 | <input type="checkbox"/> 英語による交渉力を上げること |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ること | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討すること |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めること | |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に会った時に対処できる文化的能力を養うこと | |
| <input type="checkbox"/> その他 (自由にどうぞ!) | |

2. これまでの異文化交流の経験について、該当するものに☑してください。(いくつでも)

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 海外での長期滞在 (ご両親の駐在等) | <input type="checkbox"/> 海外への長期留学 (1年以上) |
| <input type="checkbox"/> 海外への短期留学 (1年未満) | <input type="checkbox"/> ホームステイの受け入れ |
| <input type="checkbox"/> 国際交流イベントへの参加 | <input type="checkbox"/> 外国人の友達がいる |
| <input type="checkbox"/> 海外旅行に行ったことがある | |
| <input type="checkbox"/> その他 (自由にどうぞ!) | |

3. 現在の英語力を、5段階で自己評価してください。それぞれ該当する数字に○をしてください。

	よくできる	まあまあ できる	ふつう	あまり できない	全然できない
リスニング	5	4	3	2	1
スピーキング	5	4	3	2	1
ライティング	5	4	3	2	1
リーディング	5	4	3	2	1

4. 英語に関して、大学を卒業するまでに達成したい目標は何ですか（短期目標）。

5. 英語に関して、生涯に渡って達成したい目標は何ですか（長期目標）。

5. 皆さんの異文化への考え方について、5段階のうち、当てはまる数字に○をしてください¹。

	そうである	おおよそ そうである	どちらでも ない	あまり そうではない	そうではない
英語の基本的なルール（発音、文法、語法）や表現の特徴などを知っている。	5	4	3	2	1
英語の歴史的、社会的、文化的な背景知識を持ち様々な場面や状況に応じた使い分けが必要なことを知っている。	5	4	3	2	1
言語は文化やアイデンティティーと深く関係し、コミュニケーション能力は複合的なものなので、言語能力だけでは十分ではないことを知っている。	5	4	3	2	1
各言語は固有の構造や体系を持ち、言語間で類似点や相違点があり、直訳をしても完全には同じ意味にならないことを知っている。	5	4	3	2	1
それぞれの文化が複雑な価値観や規範を持ち、それが人々の世界観やものの考え方に影響し反映されていることを知っている。	5	4	3	2	1
文化には、地域、世代などの様々なグループによる下位文化があり、一人の人が複数の下位文化に属することを知っている。	5	4	3	2	1
異文化間のコミュニケーションでは、同じ行為や現象についても解釈が異なってしまうため、誤解が生じることを知っている。	5	4	3	2	1
異文化状況というのは、特に外国に行かなくとも様々な形で身近に存在し、母国にずっと居ても、そういう状況に対処するために相手の文化に根ざした考え方を学ぶ必要がある。	5	4	3	2	1
さまざまな文化にはその勢力や広がりには差はあるが、共通点や相違点が常に存在し、文化に優劣はないことを知っている。	5	4	3	2	1
異なる言語や文化との共通点・相違点に注目し、それを自然に（当たり前のこととして）把握し受け入れることができる。	5	4	3	2	1
言語や文化の違いに対する抵抗や偏見を捨て、自分とは全く違う考え方も、また理解に苦しむような「中間的な曖昧さ」も受容できる。	5	4	3	2	1

¹ 松本佳穂子（2013）「異文化間能力の指標と指導モデル構築の試み」『文明』No.18, pp.51-63 を微修正した質問表となっています。

	そうである	そうである	おおよそ そうである	あまり そうではない	そうではない
学校教育の場だけでなく、常に他の言語や文化に興味を持ち、自ら進んで異文化コミュニケーションの状況に入っていくことができる。	5	4	3	2	1
全ての言語や文化が同等であるという考え方に立ち、様々な異文化との接触に意義や価値を見出すことができる。	5	4	3	2	1
異文化・多文化のコミュニケーションで出会う障害を乗り越えるため、自分の立場を説明し、相手の文化を深く理解しようとする問題解決の努力を、根気強く強い意志を持って行うことができる。	5	4	3	2	1
自分の文化的価値観に基づく先入観や安易な一般化を排して、自他両方の文化を批判的に見たり、自らの文化と一定の距離を置いた議論をすることができる。	5	4	3	2	1
文化や価値観というものが、もともと相対的なものであるという視点から、自文化と異文化両方について対等で客観的な判断ができる。	5	4	3	2	1
異文化状況に試行錯誤しながら積極的に対応することで培ってきた「柔軟性」によって、新しい状況にも自信と余裕を持って対処することができる。	5	4	3	2	1
異文化を持つ人のアイデンティティーを自分と同等のものとして敬意を持って受け入れ、親密な関係を築くことができる。	5	4	3	2	1
異なる言語や文化について、その構成要素を一貫した手順に基づいて比較し、類似点と相違点をきちんと把握することができる。	5	4	3	2	1
自分の言語や文化について客観的で適切な説明ができ、異文化に対しても、自分の意見や見解を客観的かつ十分に表現できる。	5	4	3	2	1
英語を使う際に、相手の言語や文化との違いを常に考慮しながら、相互理解に至るコミュニケーションを構築していくことができる。	5	4	3	2	1
異なる言語と文化に対して、これまでに得た知識と経験を活用しつつ、自分なりの学び方を確立していくことができる。	5	4	3	2	1
自分の学び方が効果的かどうかを実践の中で振り返りながら、生涯を通じて外国語や異文化を継続的に学んでいける。	5	4	3	2	1

日本人学生と留学生の「学び合い」
事前アンケート ご協力をお願い

今学期の授業では、交流会、取材プロジェクト、ピア・エディティングなど、様々な形で「京都アメリカ大学コンソーシアム（通称 KCJS）」とコラボレーションしていきます。その経験から、同じキャンパスで学ぶ日本人学生と留学生が交流を深め、お互いから学び合うためには、どのような仕掛けが有効なのかを考えていきたいと思っています。より良い交流や学び合いを実現するためのヒントを得るために、皆さんの力を貸してください。

このアンケートは、学期終了時に行うアンケートと比較できるようにするため、記名式となっています。データ入力後、すぐに個人は特定できない形に加工しますので、安心して正直な気持ちを教えてください。

なお、このプロジェクトは同志社大学 学習支援・教育開発センターの助成を受けて行っています。

政策学部 岡田 彩
KCJS 中村 伊都子

日本人学生と留学生の「学び合い」
事前アンケート

お名前 _____

1. KCJS&政策学部のコラボレーションに期待することとして、該当するものを☑してください。(いくつでも)

- | | |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 友達を作る | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動すること |
| <input type="checkbox"/> 日本語の上達 | <input type="checkbox"/> ネイティブの日本語に接すること |
| <input type="checkbox"/> くださった日本語の習得 | <input type="checkbox"/> 日本語による交渉力を上げること |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ること | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討することができた |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めること | |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に会った時に対処できる文化的能力を養うこと | |
| <input type="checkbox"/> その他 (自由にどうぞ!) | |

2. これまでの異文化交流の経験について、該当するものに☑してください。(いくつでも)

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 海外での長期滞在 (ご両親の駐在等) | <input type="checkbox"/> 海外への長期留学 (1年以上) |
| <input type="checkbox"/> 海外への短期留学 (1年未満) | <input type="checkbox"/> ホームステイの受け入れ |
| <input type="checkbox"/> 国際交流イベントへの参加 | <input type="checkbox"/> 外国人の友達がいる |
| <input type="checkbox"/> 海外旅行に行ったことがある | |
| <input type="checkbox"/> その他 (自由にどうぞ!) | |

3. 現在の日本語の力を、5段階で自己評価してください。それぞれ該当する数字に○をしてください。

	よくできる	まあまあ できる	ふつう	あまり できない	全然できない
リスニング	5	4	3	2	1
スピーキング	5	4	3	2	1
ライティング	5	4	3	2	1
リーディング	5	4	3	2	1

4. 日本語に関して、大学を卒業するまでに達成したい目標は何ですか（短期目標）。

5. 日本語に関して、生涯に渡って達成したい目標は何ですか（長期目標）。

5. 皆さんの異文化への考え方について、5段階のうち、当てはまる数字に○をしてください¹。

(言語や文化について)	そうである	おおよそ そうである	どちらでも ない	あまり そうではない	そうではない
日本語の基本的なルール（発音、文法、語法）や表現の特徴などを知っている。	5	4	3	2	1
日本語の歴史的、社会的、文化的な背景知識を持ち様々な場面や状況に応じた使い分けが必要なことを知っている。	5	4	3	2	1
日本語を習得する方法やストラテジー（方略）についての知識があり、ストラテジーの効果は、その言語に対してポジティブな見方ができるかどうかによって左右されることを知っている。	5	4	3	2	1
言語は文化やアイデンティティーと深く関係し、コミュニケーション能力は複合的なものなので、言語能力だけでは十分ではないことを知っている。	5	4	3	2	1
世界には、様々な言語が存在し、さらに、多言語・多文化が接するような状況が、様々な国や地域に存在することを知っている。	5	4	3	2	1
各言語は固有の構造や体系を持ち、言語間で類似点や相違点があり、直訳をしても完全には同じ意味にならないことを知っている。	5	4	3	2	1
それぞれの文化が複雑な価値観や規範を持ち、それが人々の世界観やものの考え方に影響し反映されていることを知っている。	5	4	3	2	1
文化には、地域、世代などの様々なグループによる下位文化があり、一人の人が複数の下位文化に属することを知っている。	5	4	3	2	1
異文化間のコミュニケーションでは、同じ行為や現象についても解釈が異なってしまうため、誤解が生じることを知っている。	5	4	3	2	1
文化は固定的なものではなく、複雑に絡み合い、かつ接触やグローバリゼーションによって常に変容していることを知っている。	5	4	3	2	1
異文化状況というのは、特に外国に行かなくとも様々な形で身近に存在し、日本にずっと居ても、そういう状況に対処するために相手の文化に根ざした考え方を学ぶ必要がある。	5	4	3	2	1
さまざまな文化にはその勢力や広がりには差はあるが、共通点や相違点が常に存在し、文化に優劣はないことを知っている。	5	4	3	2	1

¹ 松本佳穂子（2013）「異文化間能力の指標と指導モデル構築の試み」『文明』No.18, pp.51-63 を微修正した質問表となっています。

(態度について)	そうである	おおよそ そうである	どちらでも ない	あまり そうではない	そうではない
異なる言語や文化との共通点・相違点に注目し、それを自然に（当たり前のこととして）把握し受け入れることができる。	5	4	3	2	1
言語や文化の違いに対する抵抗や偏見を捨て、自分とは全く違う考え方も、また理解に苦しむような「中間的な曖昧さ」も受容できる。	5	4	3	2	1
学校教育の場だけでなく、常に他の言語や文化に興味を持ち、自ら進んで異文化コミュニケーションの状況に入っていくことができる。	5	4	3	2	1
全ての言語や文化が同等であるという考え方に立ち、様々な異文化との接触に意義や価値を見出すことができる。	5	4	3	2	1
異文化・多文化のコミュニケーションで出会う障害を乗り越えるため、自分の立場を説明し、相手の文化を深く理解しようとする問題解決の努力を、根気強く強い意志を持って行うことができる。	5	4	3	2	1
自分の文化的価値観に基づく先入観や安易な一般化を排して、自他両方の文化を批判的に見たり、自らの文化と一定の距離を置いた議論をすることができる。	5	4	3	2	1
文化や価値観というものが、もともと相対的なものであるという視点から、自文化と異文化両方について対等で客観的な判断ができる。	5	4	3	2	1
異文化状況に試行錯誤しながら積極的に対応することで培ってきた「柔軟性」によって、新しい状況にも自信と余裕を持って対処することができる。	5	4	3	2	1
異文化を持つ人のアイデンティティーを自分と同等のものとして敬意を持って受け入れ、親密な関係を築くことができる。	5	4	3	2	1

(考えるスキルについて)	そうである	そうである	おおよそ そうである	あまり そうではない	そうではない
異なる言語や文化について、それを構成する要素(=構成要素)を客観的に観察・把握し、自分なりに分析することができる。	5	4	3	2	1
異なる言語や文化について、その構成要素をカテゴリーやジャンルに基づいて体系的に把握することができる。	5	4	3	2	1
異なる言語や文化について、その構成要素を一貫した手順に基づいて比較し、類似点と相違点をきちんと把握することができる。	5	4	3	2	1
自分の言語や文化について客観的で適切な説明ができ、異文化に対しても、自分の意見や見解を客観的かつ十分に表現できる。	5	4	3	2	1
日本語でのコミュニケーションを学ぶ過程で、過去に習得された言語(母語など)の知識に基づいて、それと外国語の関係についての仮説を自分で立て、比較、検証しながら学習をしていくことができる。	5	4	3	2	1
日本語を使う際に、相手の言語や文化との違いを常に考慮しながら、相互理解に至るコミュニケーションを構築していくことができる。	5	4	3	2	1
異なる言語と文化に対して、これまでに得た知識と経験を活用しつつ、自分なりの学び方を確立していくことができる。	5	4	3	2	1
自分の学び方が効果的かどうかを実践の中で振り返りながら、生涯を通じて外国語や異文化を継続的に学んでいける。	5	4	3	2	1

日本人学生と留学生の「学び合い」
事後アンケート ご協力をお願い

今学期の授業では、交流会、取材プロジェクト、ピア・エデュケーションなど、様々な形で「京都アメリカ大学コンソーシアム（通称 KCJS）」の皆さんとコラボレーションしてきました。その経験から考えたこと、感じたことを教えてください。

このアンケートは、学期初めに行ったアンケートと比較できるようにするため、記名式となっています。データ入力後、すぐに個人は特定できない形に加工しますので、安心して正直な気持ちを教えてください。成績には一切関係ありません。

なお、このプロジェクトは同志社大学 学習支援・教育開発センターの助成を受けて行っています。

政策学部 岡田 彩

KCJS 中村 伊都子

日本人学生と留学生の「学び合い」
事後アンケート

該当しない質問は、スキップしてお進みください

お名前 _____

1. 今学期、KCJS とのコラボレーション企画の中で、参加したものに☑してください。(いくつでも)

- | | |
|---|---|
| <input type="checkbox"/> 交流会 (6月16日・月曜日) | <input type="checkbox"/> 取材プロジェクト |
| <input type="checkbox"/> ピア・エディティング | <input type="checkbox"/> 準備されたプログラム以外で個人的に KCJS の学生と会った |
| <input type="checkbox"/> その他 (下記のボックスで詳しく教えてください) | |

2. 交流会 (6月16日) に参加された方にお聞きします。交流会に参加して、どのような経験ができましたか。

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 友達ができた | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動できた |
| <input type="checkbox"/> 英語が上達した | <input type="checkbox"/> ネイティブの英語に接することができた |
| <input type="checkbox"/> くれた英語が習得できた | <input type="checkbox"/> 英語による交渉力が上がった |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ることができた | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討することができた |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めることができた | |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に出会った時に対処できる文化的能力を養うことができた | |
| <input type="checkbox"/> その他 (自由にどうぞ!) | |

3. 取材プロジェクトに参加された方にお聞きします。取材プロジェクトに参加して、どのような経験ができましたか。

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 友達ができ | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動できた |
| <input type="checkbox"/> 英語が上達 した | <input type="checkbox"/> ネイティブの英語に接することができた |
| <input type="checkbox"/> くださった英語が習得できた | <input type="checkbox"/> 英語による交渉力が上がった |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ることができた | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討することができた |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めることができた | |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に出会った時に対処できる文化的能力を養うことができた | |
| <input type="checkbox"/> その他（自由にどうぞ！） | |

4. KCJS の学生が授業に来て、どのような経験ができましたか（6月23日、6月30日、7月7日、7月14日）。

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 友達ができ | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動できた |
| <input type="checkbox"/> 英語が上達 した | <input type="checkbox"/> ネイティブの英語に接することができた |
| <input type="checkbox"/> くださった英語が習得できた | <input type="checkbox"/> 英語による交渉力が上がった |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ることができた | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討することができた |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めることができた | |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に出会った時に対処できる文化的能力を養うことができた | |
| <input type="checkbox"/> その他（自由にどうぞ！） | |

5. ピア・エディティングのパートナーとは、何回会いましたか。また、合計で約何時間活動しましたか。

- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 一回も会わなかった | <input type="checkbox"/> 1回会った |
| <input type="checkbox"/> 2回会った | <input type="checkbox"/> 3回会った |
| <input type="checkbox"/> 4回会った | <input type="checkbox"/> 5回以上会った |

合計活動時間（約 時間）

6. ピア・エディティングに参加された方にお聞きします。ピア・エディティングに参加して、どのような経験ができましたか？

- | | |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 友達ができ | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動できた |
| <input type="checkbox"/> 英語が上達した | <input type="checkbox"/> ネイティブの英語に接することができた |
| <input type="checkbox"/> くれた英語が習得できた | <input type="checkbox"/> 英語による交渉力が上がった |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ることができた | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討することができた |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めることができた | |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に会った時に対処できる文化的能力を養うことができた | |
| <input type="checkbox"/> その他（自由にどうぞ！） | |

7. 「準備されたプログラム以外で個人的に KCJS の学生と会った」方にお聞きします。一緒に何をしましたか？また何回ぐらい会いましたか。また、合計で約何時間一緒に過ごしましたか。

8. KCJS とのコラボレーションにおいて、一番の学びは何でしたか。その理由も教えてください。

9. KCJS とのコラボレーションにおいて、一番印象に残ったことは何ですか。その理由も教えてください。

10. KCJS とのコラボレーション企画について、改善した方が良かったことはありますか。その理由と、可能であれば改善策もぜひ教えてください。

11. 現在の英語力を、5段階で自己評価してください。それぞれ該当する数字に○をしてください。

	よくできる	まあまあ できる	ふつう	あまり できない	全然できない
リスニング	5	4	3	2	1
スピーキング	5	4	3	2	1
ライティング	5	4	3	2	1
リーディング	5	4	3	2	1

12. 皆さんの異文化への考え方について、5段階のうち、当てはまる数字に○をしてください¹。

(言語や文化について)	学期初めに比べ とても伸びた	学期初めより やや伸びた	変わらない	学期初めに比べ あまり 伸びなかった	学期初めに比べ まったく 伸びなかった
英語の基本的なルール（発音、文法、語法）や表現の特徴などを知っている。	5	4	3	2	1
英語の歴史的、社会的、文化的な背景知識を持ち様々な場面や状況に応じた使い分けが必要なことを知っている。	5	4	3	2	1
言語は文化やアイデンティティーと深く関係し、コミュニケーション能力は複合的なものなので、言語能力だけでは十分ではないことを知っている。	5	4	3	2	1
各言語は固有の構造や体系を持ち、言語間で類似点や相違点があり、直訳をしても完全には同じ意味にならないことを知っている。	5	4	3	2	1
それぞれの文化が複雑な価値観や規範を持ち、それが人々の世界観やものの考え方に影響し反映されていることを知っている。	5	4	3	2	1
文化には、地域、世代などの様々なグループによる下位文化があり、一人の人が複数の下位文化に属することを知っている。	5	4	3	2	1
異文化間のコミュニケーションでは、同じ行為や現象についても解釈が異なってしまうため、誤解が生じることを知っている。	5	4	3	2	1
異文化状況というのは、特に外国に行かなくとも様々な形で身近に存在し、母国にずっと居ても、そういう状況に対処するために相手の文化に根ざした考え方を学ぶ必要がある。	5	4	3	2	1
さまざまな文化にはその勢力や広がりには差はあるが、共通点や相違点が常に存在し、文化に優劣はないことを知っている。	5	4	3	2	1

¹ 松本佳穂子（2013）「異文化間能力の指標と指導モデル構築の試み」『文明』No.18, pp.51-63 を微修正した質問表となっています。

(態度について)	学期初めに比べ とても伸びた	学期初めより やや伸びた	変わらない	学期初めに比べ あまり 伸びなかった	学期初めに比べ まったく 伸びなかった
異なる言語や文化との共通点・相違点に注目し、それを自然に(当たり前のこととして)把握し受け入れることができる。	5	4	3	2	1
言語や文化の違いに対する抵抗や偏見を捨て、自分とは全く違う考え方も、また理解に苦しむような「中間的な曖昧さ」も受容できる。	5	4	3	2	1
学校教育の場だけでなく、常に他の言語や文化に興味を持ち、自ら進んで異文化コミュニケーションの状況に入っていくことができる。	5	4	3	2	1
全ての言語や文化が同等であるという考え方に立ち、様々な異文化との接触到に意義や価値を見出すことができる。	5	4	3	2	1
異文化・多文化のコミュニケーションで出会う障害を乗り越えるため、自分の立場を説明し、相手の文化を深く理解しようとする問題解決の努力を、根気強く強い意志を持って行うことができる。	5	4	3	2	1
自分の文化的価値観に基づく先入観や安易な一般化を排して、自他両方の文化を批判的に見たり、自らの文化と一定の距離を置いた議論をすることができる。	5	4	3	2	1
文化や価値観というものが、もともと相対的なものであるという視点から、自文化と異文化両方について対等で客観的な判断ができる。	5	4	3	2	1
異文化状況に試行錯誤しながら積極的に対応することで培ってきた「柔軟性」によって、新しい状況にも自信と余裕を持って対処することができる。	5	4	3	2	1
異文化を持つ人のアイデンティティーを自分と同等のものとして敬意を持って受け入れ、親密な関係を築くことができる。	5	4	3	2	1

(考えるスキルについて)	学期初めに比べ とても伸びた	学期初めより やや伸びた	変わらない	学期初めに比べ あまり 伸びなかった	学期初めに比べ まったく 伸びなかった
異なる言語や文化について、その構成要素を一貫した手順に基づいて比較し、類似点と相違点をきちんと把握することができる。	5	4	3	2	1
自分の言語や文化について客観的で適切な説明ができ、異文化に対しても、自分の意見や見解を客観的かつ十分に表現できる。	5	4	3	2	1
英語を使う際に、相手の言語や文化との違いを常に考慮しながら、相互理解に至るコミュニケーションを構築していくことができる。	5	4	3	2	1
異なる言語と文化に対して、これまでに得た知識と経験を活用しつつ、自分なりの学び方を確立していくことができる。	5	4	3	2	1
自分の学び方が効果的かどうかを実践の中で振り返りながら、生涯を通じて外国語や異文化を継続的に学んでいける。	5	4	3	2	1

日本人学生と留学生の「学び合い」
事後アンケート ご協力をお願い

今学期の授業では、交流会、取材プロジェクト、ピア・エディティングなど、様々な形で同志社大学政策学部の皆さんとコラボレーションしてきました。その経験から考えたこと、感じたことを教えてください。

このアンケートは、学期初めに行ったアンケートと比較できるようにするため、記名式となっています。データ入力後、すぐに個人は特定できない形に加工しますので、安心して正直な気持ちを教えてください。成績には一切関係ありません。

なお、このプロジェクトは同志社大学 学習支援・教育開発センターの助成を受けて行っています。

政策学部 岡田 彩

KCJS 中村 伊都子

日本人学生と留学生の「学び合い」
事後アンケート

該当しない質問は、スキップしてお進みください

お名前 _____

1. 交流会（6月16日）に参加して、どのような経験ができましたか？

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 友達ができ | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動できた |
| <input type="checkbox"/> 日本語が上達 した | <input type="checkbox"/> ネイティブの日本語に接することができた |
| <input type="checkbox"/> くれた日本語が習得できた | <input type="checkbox"/> 日本語による交渉力が上がった |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ることができた | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討することができた |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めることができた | |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に出会った時に対処できる文化的能力を養うことができた | |
| <input type="checkbox"/> その他（自由にどうぞ!） | |

2. 取材プロジェクトに参加して、どのような経験ができましたか？

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 友達ができ | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動できた |
| <input type="checkbox"/> 日本語が上達 した | <input type="checkbox"/> ネイティブの日本語に接することができた |
| <input type="checkbox"/> くれた日本語が習得できた | <input type="checkbox"/> 日本語による交渉力が上がった |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ることができた | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討することができた |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めることができた | |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に出会った時に対処できる文化的能力を養うことができた | |
| <input type="checkbox"/> その他（自由にどうぞ!） | |

3. ピア・エディティングに参加して、どのような経験ができましたか？

- | | |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 友達ができ | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動できた |
| <input type="checkbox"/> 日本語が上達 した | <input type="checkbox"/> ネイティブの日本語に接することができた |
| <input type="checkbox"/> くれた日本語が習得できた | <input type="checkbox"/> 日本語による交渉力が上がった |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ることができた | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討することができた |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めることができた | |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に会った時に対処できる文化的能力を養うことができた | |
| <input type="checkbox"/> その他（自由にどうぞ！） | |

4. ピア・エディティングのパートナーとは、何回会いましたか。

- | | |
|-------------------------------------|----------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 一回も会わな かった | <input type="checkbox"/> 1回会った |
| <input type="checkbox"/> 2回会った | <input type="checkbox"/> 3回会った |
| <input type="checkbox"/> 4回会った | <input type="checkbox"/> 5回以上会った |

5. 準備されたプログラム以外で、個人的に政策学部の学生と会いましたか。その際、一緒に何をしましたか。また、何回ぐらい会いましたか。

6. 政策学部とのコラボレーションにおいて、一番印象に残ったことは何ですか。その理由も教えてください。

7. 政策学部とのコラボレーションにおいて、どのようなプログラムや交流の場面が、一番自分にとって影響力が大きかったと感じましたか。その理由も教えてください。

8. 政策学部とのコラボレーション企画について、改善した方が良かったことはありますか。その理由と、可能であれば改善策もぜひ教えてください。

9. 現在の日本語力を、5段階で自己評価してください。それぞれ該当する数字に○をしてください。

	よくできる	まあまあ できる	ふつう	あまり できない	全然できない
リスニング	5	4	3	2	1
スピーキング	5	4	3	2	1
ライティング	5	4	3	2	1
リーディング	5	4	3	2	1

10. 皆さんの異文化への考え方について、5段階のうち、当てはまる数字に○をしてください¹。

(言語や文化について)	学期初めに比べても伸びた	学期初めよりやや伸びた	どちらでもない	学期初めに比べてあまり伸びなかった	学期初めに比べてまったく伸びなかった
日本語の基本的なルール（発音、文法、語法）や表現の特徴などを知っている。	5	4	3	2	1
日本語の歴史的、社会的、文化的な背景知識を持ち様々な場面や状況に応じた使い分けが必要なことを知っている。	5	4	3	2	1
言語は文化やアイデンティティーと深く関係し、コミュニケーション能力は複合的なものなので、言語能力だけでは十分ではないことを知っている。	5	4	3	2	1
各言語は固有の構造や体系を持ち、言語間で類似点や相違点があり、直訳をしても完全には同じ意味にならないことを知っている。	5	4	3	2	1
それぞれの文化が複雑な価値観や規範を持ち、それが人々の世界観やものの考え方に影響し反映されていることを知っている。	5	4	3	2	1
文化には、地域、世代などの様々なグループによる下位文化があり、一人の人が複数の下位文化に属することを知っている。	5	4	3	2	1
異文化間のコミュニケーションでは、同じ行為や現象についても解釈が異なってしまうため、誤解が生じることを知っている。	5	4	3	2	1
異文化状況というのは、特に外国に行かなくとも様々な形で身近に存在し、母国にずっと居ても、そういう状況に対処するために相手の文化に根ざした考え方を学ぶ必要がある。	5	4	3	2	1
さまざまな文化にはその勢力や広がりには差はあるが、共通点や相違点が常に存在し、文化に優劣はないことを知っている。	5	4	3	2	1

¹ 松本佳穂子（2013）「異文化間能力の指標と指導モデル構築の試み」『文明』No.18, pp.51-63 を微修正した質問表となっています。

(態度について)	学期初めに比べ とても伸びた	学期初めより やや伸びた	どちらでも ない	学期初めに比べ あまり 伸びなかった	学期初めに比べ まったく 伸びなかった
異なる言語や文化との共通点・相違点に注目し、それを自然に（当たり前のこととして）把握し受け入れることができる。	5	4	3	2	1
言語や文化の違いに対する抵抗や偏見を捨て、自分とは全く違う考え方も、また理解に苦しむような「中間的な曖昧さ」も受容できる。	5	4	3	2	1
学校教育の場だけでなく、常に他の言語や文化に興味を持ち、自ら進んで異文化コミュニケーションの状況に入っていくことができる。	5	4	3	2	1
全ての言語や文化が同等であるという考え方に立ち、様々な異文化との接触に意義や価値を見出すことができる。	5	4	3	2	1
異文化・多文化のコミュニケーションで出会う障害を乗り越えるため、自分の立場を説明し、相手の文化を深く理解しようとする問題解決の努力を、根気強く強い意志を持って行うことができる。	5	4	3	2	1
自分の文化的価値観に基づく先入観や安易な一般化を排して、自他両方の文化を批判的に見たり、自らの文化と一定の距離を置いた議論をすることができる。	5	4	3	2	1
文化や価値観というものが、もともと相対的なものであるという視点から、自文化と異文化両方について対等で客観的な判断ができる。	5	4	3	2	1
異文化状況に試行錯誤しながら積極的に対応することで培ってきた「柔軟性」によって、新しい状況にも自信と余裕を持って対処することができる。	5	4	3	2	1
異文化を持つ人のアイデンティティを自分と同等のものとして敬意を持って受け入れ、親密な関係を築くことができる。	5	4	3	2	1

(考えるスキルについて)	学期初めに比べ とても伸びた	学期初めより やや伸びた	どちらでも ない	学期初めに比べ あまり 伸びなかった	学期初めに比べ まったく 伸びなかった
異なる言語や文化について、その構成要素を一貫した手順に基づいて比較し、類似点と相違点をきちんと把握することができる。	5	4	3	2	1
自分の言語や文化について客観的で適切な説明ができ、異文化に対しても、自分の意見や見解を客観的かつ十分に表現できる。	5	4	3	2	1
日本語を使う際に、相手の言語や文化との違いを常に考慮しながら、相互理解に至るコミュニケーションを構築していくことができる。	5	4	3	2	1
異なる言語と文化に対して、これまでに得た知識と経験を活用しつつ、自分なりの学び方を確立していくことができる。	5	4	3	2	1
自分の学び方が効果的かどうかを実践の中で振り返りながら、生涯を通じて外国語や異文化を継続的に学んでいける。	5	4	3	2	1

日本人学生と留学生の「学び合い」
アンケートご協力をお願い

今学期の授業では、交流会や合同授業、課題の助け合いなど、様々な形で「京都アメリカ大学コンソーシアム（通称 KCJS）」とコラボレーションしていきます。その経験から、同じキャンパスで学ぶ日本人学生と留学生が交流を深め、お互いから学び合うためには、どのような仕掛けが有効なのかを考えていきたいと思っています。より良い交流や学び合いを実現するためのヒントを得るために、皆さんの力を貸してください。

このアンケートは、学期終了時に行うアンケートと比較できるようにするため、記名式となっています。データ入力後、すぐに個人は特定できない形に加工しますので、安心して正直な気持ちを教えてください。

なお、このプロジェクトは同志社大学 学習支援・教育開発センターの助成を受けて行っています。

政策学部 岡田 彩
KCJS 中村 伊都子

日本人学生と留学生の「学び合い」
事前アンケート

お名前 _____

1. KCJS と政策学部のコラボレーションに期待することとして、該当するものを☑してください(いくつでも)。

- | | |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 友達を作る | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動すること |
| <input type="checkbox"/> 英語の上達 | <input type="checkbox"/> ネイティブの英語に接すること |
| <input type="checkbox"/> くれた英語の習得 | <input type="checkbox"/> 英語による交渉力を上げること |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ること | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討すること |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めること | |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に会った時に対処できる文化的能力を養うこと | |
| <input type="checkbox"/> その他（自由にどうぞ!） | |

2. これまでの異文化交流の経験について、該当するものに☑してください。(いくつでも)

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> 海外での長期滞在（ご両親の駐在等） | <input type="checkbox"/> 海外への長期留学（1年以上） |
| <input type="checkbox"/> 海外への短期留学（1年未満） | <input type="checkbox"/> ホームステイの受け入れ |
| <input type="checkbox"/> 国際交流イベントへの参加 | <input type="checkbox"/> 外国人の友達がいる |
| <input type="checkbox"/> 海外旅行に行ったことがある | |
| <input type="checkbox"/> その他（自由にどうぞ!） | |

3. 英語に関して、大学を卒業するまでに達成したい目標は何ですか。

4. 英語に関して、生涯に渡って達成したい目標は何ですか。

5. 皆さんの異文化への考え方について、5段階のうち、当てはまる数字に○をしてください¹。

(言語や文化について)	そうである	おおよそ そうである	どちらでも ない	あまり そうではない	そうではない
英語の基本的なルール（発音、文法、語法）や表現の特徴などを知っている。	5	4	3	2	1
英語の歴史的、社会的、文化的な背景知識を持ち様々な場面や状況に応じた使い分けが必要なことを知っている。	5	4	3	2	1
言語は文化やアイデンティティーと深く関係し、コミュニケーション能力は複合的なものなので、言語能力だけでは十分ではないことを知っている。	5	4	3	2	1
各言語は固有の構造や体系を持ち、言語間で類似点や相違点があり、直訳をしても完全には同じ意味にならないことを知っている。	5	4	3	2	1
それぞれの文化が複雑な価値観や規範を持ち、それが人々の世界観やものの考え方に影響し反映されていることを知っている。	5	4	3	2	1
文化には、地域、世代などの様々なグループによる下位文化があり、一人の人が複数の下位文化に属することを知っている。	5	4	3	2	1
異文化間のコミュニケーションでは、同じ行為や現象についても解釈が異なってしまうため、誤解が生じることを知っている。	5	4	3	2	1
異文化状況というのは、特に外国に行かなくとも様々な形で身近に存在し、母国にずっと居ても、そういう状況に対処するために相手の文化に根ざした考え方を学ぶ必要がある。	5	4	3	2	1
さまざまな文化にはその勢力や広がりには差はあるが、共通点や相違点が常に存在し、文化に優劣はないことを知っている。	5	4	3	2	1

¹ 松本佳穂子（2013）「異文化間能力の指標と指導モデル構築の試み」『文明』No.18, pp.51-63 を微修正した質問表となっています。

(態度について)	そうである	おおよそ そうである	どちらでも ない	あまり そうではない	そうではない
異なる言語や文化との共通点・相違点に注目し、それを自然に（当たり前のこととして）把握し受け入れることができる。	5	4	3	2	1
言語や文化の違いに対する抵抗や偏見を捨て、自分とは全く違う考え方も、また理解に苦しむような「中間的な曖昧さ」も受容できる。	5	4	3	2	1
学校教育の場だけでなく、常に他の言語や文化に興味を持ち、自ら進んで異文化コミュニケーションの状況に入っていくことができる。	5	4	3	2	1
全ての言語や文化が同等であるという考え方に立ち、様々な異文化との接触に意義や価値を見出すことができる。	5	4	3	2	1
異文化・多文化のコミュニケーションで出会う障害を乗り越えるため、自分の立場を説明し、相手の文化を深く理解しようとする問題解決の努力を、根気強く強い意志を持って行うことができる。	5	4	3	2	1
自分の文化的価値観に基づく先入観や安易な一般化を排して、自他両方の文化を批判的に見たり、自らの文化と一定の距離を置いた議論をすることができる。	5	4	3	2	1
文化や価値観というものが、もともと相対的なものであるという視点から、自文化と異文化両方について対等で客観的な判断ができる。	5	4	3	2	1
異文化状況に試行錯誤しながら積極的に対応することで培ってきた「柔軟性」によって、新しい状況にも自信と余裕を持って対処することができる。	5	4	3	2	1
異文化を持つ人のアイデンティティを自分と同等のものとして敬意を持って受け入れ、親密な関係を築くことができる。	5	4	3	2	1

(考えるスキルについて)	そうである	おおよそ そうである	どちらでも ない	あまり そうではない	そうではない
異なる言語や文化について、その構成要素を一貫した手順に基づいて比較し、類似点と相違点をきちんと把握することができる。	5	4	3	2	1
自分の言語や文化について客観的で適切な説明ができ、異文化に対しても、自分の意見や見解を客観的かつ十分に表現できる。	5	4	3	2	1
英語を使う際に、相手の言語や文化との違いを常に考慮しながら、相互理解に至るコミュニケーションを構築していくことができる。	5	4	3	2	1
異なる言語と文化に対して、これまでに得た知識と経験を活用しつつ、自分なりの学び方を確立していくことができる。	5	4	3	2	1
自分の学び方が効果的かどうかを実践の中で振り返りながら、生涯を通じて外国語や異文化を継続的に学んでいける。	5	4	3	2	1

Collaboration Project between Kyoto Consortium for Japanese Studies (KCJS)

and

Doshisha University Department of Policy Studies

“Mutual Learning between Japanese and International Students”

Pre-Project Questionnaire

We are excited to have join the collaboration project between KCJS and Department of Policy Studies at Doshisha University! During the semester, we plan to organize a party, joint classes, and opportunities to help each other's class projects. Through this collaboration, we are trying to figure out what types of interacting opportunities are the most effective in facilitating intercultural exchange and mutual learning between Japanese and international students studying on the same campus. Please help us to think about this question from your experience this semester.

In this questionnaire, we first ask you to write down your name so that we can compare your thoughts before and after the semester. Your name will be deleted as soon as the data is entered into a spreadsheet so that no one is able to identify a specific individual. So please tell us your honest thoughts and feelings.

Please note that this project is funded by Center for Learning Support and Faculty Development at Doshisha University.

Aya Okada (Doshisha University)

Itsuko Nakamura (KCJS)

Questions Begin from Here

1. Please tell us your name: _____
2. Please check what you expect to achieve in this collaboration project between KCJS and Department of Policy Studies (check as many as you like).
 - Make new friends
 - Work together with people with different cultural backgrounds
 - Improve Japanese language
 - Communicate with the natives of Japanese language
 - Learn broken Japanese
 - Improve the ability to negotiate in Japanese
 - Learn about myself
 - Question what I take for granted and re-examine them
 - Deepen intercultural understanding
 - Develop the cultural ability to deal with unexpected situations

- Others (write down anything that comes to your mind!)

2. Please check the different types of intercultural exchange you've experienced before (check as many as you like).

- Lived abroad for a long term
- Studied abroad for more than 1 year
- Studied abroad for less than 1 year
- Hosted homestay students
- Participated in international exchange events
- Have foreign friend(s)
- Traveled overseas
- Others (write down anything that comes to your mind!)

3. What is your goal on Japanese language that you want to achieve before graduating from the university?

4. What is your lifelong goal about Japanese language?

5. Please circle the number (or bold the number) that you most agree with for each statement about dealing with different cultures.

(Statements about Language and Culture)	Strongly Agree	Slightly Agree	Neither Agree or Disagree	Slightly Disagree	Strongly Disagree
I know the basic rules (pronunciation, grammar, idioms) as well as the characteristics of expressions in Japanese language.	5	4	3	2	1
I have knowledge on historical, societal, and cultural backgrounds of Japanese language. I also know that we must use the language differently depending on a specific situation.	5	4	3	2	1
Language is closely related to culture and identity. One's language skills is not the only thing needed for complex communication ability.	5	4	3	2	1
Each language has its own structure and system. There are similarities and differences, so a direct translation may not result in the exact same meaning.	5	4	3	2	1
Each culture has complex values and norms. They influence, and are reflected upon, people's world view and ways of thinking.	5	4	3	2	1
Culture has subcultures based on various groups such as regions and generations. One person may belong to multiple subcultures.	5	4	3	2	1
Misunderstanding in intercultural communication may occur because the exact same behavior or phenomenon can be interpreted differently.	5	4	3	2	1
One may face intercultural situations in one's home country, without going abroad. To deal with these situations, one must learn to think from the perspective of others' cultures.	5	4	3	2	1
Despite the variance in power and spread of different cultures, there are always going to be similarities and differences, and no culture is inferior or superior than others.	5	4	3	2	1

(Statements about Attitudes)	Strongly Agree	Slightly Agree	Neither Agree or Disagree	Slightly Disagree	Strongly Disagree
I am able to see the similarities and differences of different languages and cultures. I can understand and accept them naturally.	5	4	3	2	1
I am able to accept ideas that are completely different from mine, forgetting any push-back or prejudice that I may have about differences in language and culture. I am also able to accept “vagueness” that I may have trouble understanding.	5	4	3	2	1
I am eager to, and am able to, step into intercultural situations in places other than schools with interests in different languages and cultures.	5	4	3	2	1
I am able to identify the significance and value of communicating with different cultures based on the idea that all languages and cultures are equal.	5	4	3	2	1
In overcoming the obstacles that may emerge in intercultural, multi-cultural communication, I am able to explain myself patiently with firm intention and make the effort to solve the problem in understanding the others’ cultures.	5	4	3	2	1
I am able to critically observe both my culture and different cultures, while eliminating perceived opinions or simple generalizations based on my cultural values. I am also able to make discussions while keeping a certain distance with my own culture.	5	4	3	2	1
Based on the understanding that culture and value are relative by nature, I am able to make objective and equal judgments about my culture and other cultures.	5	4	3	2	1
I am able to handle new situations confidently in a relaxing manner with “flexibility” that I’ve developed through trial and error in the experience of dealing with intercultural situations.	5	4	3	2	1
I am able to develop close relationships with people with different cultural backgrounds while respecting their identity.	5	4	3	2	1

(Statements about Abilities to Think)	Strongly Agree	Slightly Agree	Neither Agree or Disagree	Slightly Disagree	Strongly Disagree
I am able to understand the similarities and differences about different languages and cultures by comparing the elements in a consistent manner.	5	4	3	2	1
I am able to provide objective and appropriate explanation about my mother tongue and culture. I am also able to express objectively and sufficiently my opinions and understandings about different culture.	5	4	3	2	1
I am able to communicate for mutual understanding in Japanese language while taking into account linguistic and cultural differences.	5	4	3	2	1
I am able to develop my way of learning based on prior knowledge and experience about different languages and cultures.	5	4	3	2	1
I am able to continue learning foreign languages and different cultures for a lifetime, while constantly reviewing in practice the effectiveness of my learning style.	5	4	3	2	1

日本人学生と留学生の「学び合い」
事後アンケート ご協力をお願い

今学期の授業では、交流会、異文化に関する合同授業、プロジェクトの助け合いなど、様々な形で「京都アメリカ大学コンソーシアム（通称 KCJS）」の皆さんとコラボレーションしてきました。その経験から考えたこと、感じたことを教えてください。

このアンケートは、学期初めに行ったアンケートと比較できるようにするため、記名式となっています。データ入力後、すぐに個人は特定できない形に加工しますので、安心して正直な気持ちを教えてください。成績には一切関係ありません。

なお、このプロジェクトは同志社大学 学習支援・教育開発センターの助成を受けて行っています。

政策学部 岡田 彩
KCJS 中村 伊都子

日本人学生と留学生の「学び合い」
事後アンケート

該当しない質問は、スキップしてお進みください

お名前 _____

1. 今学期、KCJS とのコラボレーション企画の中で、参加したものに☑してください。(いくつでも)

- 交流会 (10月17日・金曜日)
- 異文化に関する合同授業 (10月20日・和食の職人さん)
- 異文化に関する合同授業 (11月10日・糸あやつり人形の職人さん)
- 異文化に関する合同授業 (11月26日・能楽の職人さん)
- プロジェクトの助け合い (KCJS 生が政策学部生の発表を助ける)
- プロジェクトの助け合い (政策学部生が KCJS 生のプロジェクトを助ける)
- 準備されたプログラム以外で個人的に KCJS の学生と会った
- その他 (下記のボックスで詳しく教えてください)

2. 交流会 (10月17日) に参加された方にお聞きします。交流会に参加して、どのような経験ができましたか。

- 友達ができただ
- 文化が違う人と共に活動できた
- 英語の運用能力が上達した
- ネイティブの英語に接することができた
- くれた英語が習得できた
- 英語による交渉力が上がった
- 自分を知ることができた
- 当たり前を疑い、再検討することができた
- 異文化理解を深めることができた
- 交流会をきっかけに、教室外で遊ぶことができた
- 予測できない場面に出会った時に対処できる文化的能力を養うことができた
- その他 (自由にどうぞ!)

3. 異文化に関する合同授業に参加された方にお聞きします。合同授業に参加して、どのような経験ができましたか。

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 友達ができた | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動できた |
| <input type="checkbox"/> 英語の運用能力が上達した | <input type="checkbox"/> ネイティブの英語に接することができた |
| <input type="checkbox"/> くれた英語が習得できた | <input type="checkbox"/> 英語による交渉力が上がった |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ることができた | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討することができた |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めることができた | <input type="checkbox"/> 合同授業をきっかけに、教室外で遊ぶことができた |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に出会った時に対処できる文化的能力を養うことができた | |
| <input type="checkbox"/> その他（自由にどうぞ！） | |

4. プロジェクトの助け合い（KCJS 生が政策学部生の発表を助ける）では、KCJS のパートナーと何回会いましたか。また、合計で約何時間活動しましたか。

- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 一回も会わなかった | <input type="checkbox"/> 1回会った |
| <input type="checkbox"/> 2回会った | <input type="checkbox"/> 3回会った |
| <input type="checkbox"/> 4回会った | <input type="checkbox"/> 5回以上会った |

合計活動時間（約 時間）

一回も会わなかった場合、どのように助け合いを遂行しましたか。

5. プロジェクトの助け合い（政策学部生が KCJS 生のプロジェクトを助ける）では、KCJS のパートナーと何回会いましたか。また、合計で約何時間活動しましたか。

- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 一回も会わなかった | <input type="checkbox"/> 1回会った |
| <input type="checkbox"/> 2回会った | <input type="checkbox"/> 3回会った |
| <input type="checkbox"/> 4回会った | <input type="checkbox"/> 5回以上会った |

合計活動時間（約 時間）

一回も会わなかった場合、どのように助け合いを遂行しましたか。

6. プロジェクトの助け合いに参加して、どのような経験ができましたか？

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> 友達ができ | <input type="checkbox"/> 文化が違う人と共に活動でき |
| <input type="checkbox"/> 英語の運用能力が上達した | <input type="checkbox"/> ネイティブの英語に接することができ |
| <input type="checkbox"/> くれた英語が習得でき | <input type="checkbox"/> 英語による交渉力が上がった |
| <input type="checkbox"/> 自分を知ることができ | <input type="checkbox"/> 当たり前を疑い、再検討することができ |
| <input type="checkbox"/> 異文化理解を深めることができ | <input type="checkbox"/> 助け合いをきっかけに、教室外で遊ぶことができ |
| <input type="checkbox"/> 予測できない場面に出会った時に対処できる文化的能力を養うことができ | |
| <input type="checkbox"/> その他（自由にどうぞ！） | |

7. 「準備されたプログラム以外で個人的に KCJS の学生と会った」方にお聞きします。一緒に何をしましたか？
また何回ぐらい会いましたか。また、合計で約何時間一緒に過ごしましたか。

8. KCJS とのコラボレーションにおいて、一番の学びは何でしたか。その理由も教えてください。

9. KCJS とのコラボレーションにおいて、一番印象に残ったことは何ですか。その理由も教えてください。

10. KCJS とのコラボレーション企画について、改善した方が良く感じたことはありますか。
その理由と、可能であれば改善策もぜひ教えてください。

1 1. 皆さんの異文化への考え方について、5段階のうち、当てはまる数字に○をしてください¹。

(言語や文化について)	学期初めに比べ とても伸びた	学期初めより やや伸びた	変わらない	学期初めに比べ あまり 伸びなかった	学期初めに比べ まったく 伸びなかった
英語の基本的なルール（発音、文法、語法）や表現の特徴などを知っている。	5	4	3	2	1
英語の歴史的、社会的、文化的な背景知識を持ち様々な場面や状況に応じた使い分けが必要なことを知っている。	5	4	3	2	1
言語は文化やアイデンティティーと深く関係し、コミュニケーション能力は複合的なものなので、言語能力だけでは十分ではないことを知っている。	5	4	3	2	1
各言語は固有の構造や体系を持ち、言語間で類似点や相違点があり、直訳をしても完全には同じ意味にならないことを知っている。	5	4	3	2	1
それぞれの文化が複雑な価値観や規範を持ち、それが人々の世界観やものの考え方に影響し反映されていることを知っている。	5	4	3	2	1
文化には、地域、世代などの様々なグループによる下位文化があり、一人の人が複数の下位文化に属することを知っている。	5	4	3	2	1
異文化間のコミュニケーションでは、同じ行為や現象についても解釈が異なってしまうため、誤解が生じることを知っている。	5	4	3	2	1
異文化状況というのは、特に外国に行かなくとも様々な形で身近に存在し、母国にずっと居ても、そういう状況に対処するために相手の文化に根ざした考え方を学ぶ必要がある。	5	4	3	2	1
さまざまな文化にはその勢力や広がりには差はあるが、共通点や相違点が常に存在し、文化に優劣はないことを知っている。	5	4	3	2	1

¹ 松本佳穂子（2013）「異文化間能力の指標と指導モデル構築の試み」『文明』No.18, pp.51-63 を微修正した質問表となっています。

(態度について)	学期初めに比べ とても伸びた	学期初めより やや伸びた	変わらない	学期初めに比べ あまり 伸びなかった	学期初めに比べ まったく 伸びなかった
異なる言語や文化との共通点・相違点に注目し、それを自然に(当たり前のこととして)把握し受け入れることができる。	5	4	3	2	1
言語や文化の違いに対する抵抗や偏見を捨て、自分とは全く違う考え方も、また理解に苦しむような「中間的な曖昧さ」も受容できる。	5	4	3	2	1
学校教育の場だけでなく、常に他の言語や文化に興味を持ち、自ら進んで異文化コミュニケーションの状況に入っていくことができる。	5	4	3	2	1
全ての言語や文化が同等であるという考え方に立ち、様々な異文化との接触到に意義や価値を見出すことができる。	5	4	3	2	1
異文化・多文化のコミュニケーションで出会う障害を乗り越えるため、自分の立場を説明し、相手の文化を深く理解しようとする問題解決の努力を、根気強く強い意志を持って行うことができる。	5	4	3	2	1
自分の文化的価値観に基づく先入観や安易な一般化を排して、自他両方の文化を批判的に見たり、自らの文化と一定の距離を置いた議論をすることができる。	5	4	3	2	1
文化や価値観というものが、もともと相対的なものであるという視点から、自文化と異文化両方について対等で客観的な判断ができる。	5	4	3	2	1
異文化状況に試行錯誤しながら積極的に対応することで培ってきた「柔軟性」によって、新しい状況にも自信と余裕を持って対処することができる。	5	4	3	2	1
異文化を持つ人のアイデンティティを自分と同等のものとして敬意を持って受け入れ、親密な関係を築くことができる。	5	4	3	2	1

(考えるスキルについて)	学期初めに比べ とても伸びた	学期初めより やや伸びた	変わらない	学期初めに比べ あまり 伸びなかった	学期初めに比べ まったく 伸びなかった
異なる言語や文化について、その構成要素を一貫した手順に基づいて比較し、類似点と相違点をきちんと把握することができる。	5	4	3	2	1
自分の言語や文化について客観的で適切な説明ができ、異文化に対しても、自分の意見や見解を客観的かつ十分に表現できる。	5	4	3	2	1
英語を使う際に、相手の言語や文化との違いを常に考慮しながら、相互理解に至るコミュニケーションを構築していくことができる。	5	4	3	2	1
異なる言語と文化に対して、これまでに得た知識と経験を活用しつつ、自分なりの学び方を確立していくことができる。	5	4	3	2	1
自分の学び方が効果的かどうかを実践の中で振り返りながら、生涯を通じて外国語や異文化を継続的に学んでいける。	5	4	3	2	1

Collaboration Project between Kyoto Consortium for Japanese Studies (KCJS)

and

Doshisha University Department of Policy Studies

“Mutual Learning between Japanese and International Students”

Post-Project Questionnaire

I hope you have enjoyed multiple programs to collaborate with students from Doshisha University Department of Policy Studies (or Seisaku students). Please let us know what you thought and felt through participating in exchange party, joint classes, and peer-helping.

In this questionnaire, we first ask you to write down your name so that we can compare your thoughts before and after the semester. Your name will be deleted as soon as the data is entered into a spreadsheet so that no one is able to identify a specific individual. Please tell us your honest thoughts and feelings.

Please note that this project is funded by Center for Learning Support and Faculty Development at Doshisha University.

Aya Okada (Doshisha University)

Itsuko Nakamura (KCJS)

Questions Begin from Here

Please tell us your name: _____

1. Please check the programs that you participated this semester (check all that apply).

- Class with Okada-Sensei (Wednesday, October 15)
- Joint class (Monday, October 20 with Washoku restaurant owner)
- Joint class (Monday, November 10 with doll performer)
- Joint class (Wednesday, November 26 with Noh player)
- Peer-helping (KCJS students help Seisaku students for their presentation)
- Peer-helping (Seisaku students help KCJS students for their project)
- Personally met with Seisaku students outside of above programs
- Others (let us in detail in the box below)

2. Please check what you were able to achieve through a class with Okada-Sensei on October 15.

- Work together with people with different cultural backgrounds
- Improve proficiency in Japanese language
- Communicate with the natives of Japanese language
- Learn broken Japanese
- Improve the ability to negotiate in Japanese
- Learn about myself
- Question what I take for granted and re-examine them
- Deepen intercultural understanding
- Develop the cultural ability to deal with unexpected situations
- Others (write down anything that comes to your mind!)

3. Please check what you were able to achieve through the experience of joining the exchange party on October 17 (check as many as you like).

- Make new friends
- Work together with people with different cultural backgrounds
- Improve proficiency in Japanese language
- Communicate with the natives of Japanese language
- Learn broken Japanese
- Improve the ability to negotiate in Japanese
- Learn about myself
- Question what I take for granted and re-examine them
- Deepen intercultural understanding
- Arrange to meet outside of class/program with Seisaku students
- Develop the cultural ability to deal with unexpected situations
- Others (write down anything that comes to your mind!)

4. Please check what you were able to achieve through the experience of joint classes (October 20 with Washoku restaurant owner, November 10 with doll performer, November 26 with Noh player; check as many as you like).

- Make new friends
- Work together with people with different cultural backgrounds
- Improve proficiency in Japanese language
- Communicate with the natives of Japanese language
- Learn broken Japanese
- Improve the ability to negotiate in Japanese
- Learn about myself
- Question what I take for granted and re-examine them
- Deepen intercultural understanding
- Arrange to meet outside of class/program with Seisaku students
- Develop the cultural ability to deal with unexpected situations
- Others (write down anything that comes to your mind!)

5. How many times did you meet with Seisaku students for peer-helping (KCJS students help Seisaku students for their presentation)? How many hours in total did you work together?

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> Did not meet at all | <input type="checkbox"/> Once |
| <input type="checkbox"/> Twice | <input type="checkbox"/> Three times |
| <input type="checkbox"/> Four times | <input type="checkbox"/> More than five times |

Total hours: About hours

If you did not meet at all, how did you help each other?

6. How many times did you meet with Seisaku students in peer helping (Seisaku students help KCJS students for their project)? How many hours in total did you work together?

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> Did not meet at all | <input type="checkbox"/> Once |
| <input type="checkbox"/> Twice | <input type="checkbox"/> Three times |
| <input type="checkbox"/> Four times | <input type="checkbox"/> More than five times |

Total hours: About hours

If you did not meet at all, how did you help each other?

7. Please check what you were able to achieve through the experience of peer-helping (check as many as you like).

- Make new friends
- Work together with people with different cultural backgrounds
- Improve proficiency in Japanese language
- Communicate with the natives of Japanese language
- Learn broken Japanese
- Improve the ability to negotiate in Japanese
- Learn about myself
- Question what I take for granted and re-examine them
- Deepen intercultural understanding
- Arrange to meet outside of class/program with Seisaku students
- Develop the cultural ability to deal with unexpected situations
- Others (write down anything that comes to your mind!)

8. If you personally met with Seisaku students outside of above programs, what did you do together? How many times did you meet with Seisaku students, and about how many hours did you spend together?

9. What was the biggest learning in programs collaborating with Seisaku students? Why do you think so?

10. What was the most impressive thing in programs collaborating with Seisaku students? Why do you think so?

11. Were there anything you thought should be improved in programs collaborating with Seisaku students? Please tell us why and your ideas for improvement.

12. Please circle the number (or bold the number) that you most agree with for each statement on dealing with different cultures.

(Statements about Language and Culture)	Strongly Agree	Slightly Agree	Neither Agree or Disagree	Slightly Disagree	Strongly Disagree
I know the basic rules (pronunciation, grammar, idioms) as well as the characteristics of expressions in Japanese language.	5	4	3	2	1
I have knowledge on historical, societal, and cultural backgrounds of Japanese language. I also know that we must use the language differently depending on a specific situation.	5	4	3	2	1
Language is closely related to culture and identity. One's language skills is not the only thing needed for complex communication ability.	5	4	3	2	1
Each language has its own structure and system. There are similarities and differences, so a direct translation may not result in the exact same meaning.	5	4	3	2	1
Each culture has complex values and norms. They influence, and are reflected upon, people's world view and ways of thinking.	5	4	3	2	1
Culture has subcultures based on various groups such as regions and generations. One person may belong to multiple subcultures.	5	4	3	2	1
Misunderstanding in intercultural communication may occur because the exact same behavior or phenomenon can be interpreted differently.	5	4	3	2	1
One may face intercultural situations in one's home country, without going abroad. To deal with these situations, one must learn to think from the perspective of others' cultures.	5	4	3	2	1
Despite the variance in power and spread of different cultures, there are always going to be similarities and differences, and no culture is inferior or superior then others.	5	4	3	2	1

(Statements about Attitudes)	Strongly Agree	Slightly Agree	Neither Agree or Disagree	Slightly Disagree	Strongly Disagree
I am able to see the similarities and differences of different languages and cultures. I can understand and accept them naturally.	5	4	3	2	1
I am able to accept ideas that are completely different from mine, forgetting any push-back or prejudice that I may have about differences in language and culture. I am also able to accept “vagueness” that I may have trouble understanding.	5	4	3	2	1
I am eager to, and am able to, step into intercultural situations in places other than schools with interests in different languages and cultures.	5	4	3	2	1
I am able to identify the significance and value of communicating with different cultures based on the idea that all languages and cultures are equal.	5	4	3	2	1
In overcoming the obstacles that may emerge in intercultural, multi-cultural communication, I am able to explain myself patiently with firm intention and make the effort to solve the problem in understanding the others’ cultures.	5	4	3	2	1
I am able to critically observe both my culture and different cultures, while eliminating perceived opinions or simple generalizations based on my cultural values. I am also able to make discussions while keeping a certain distance with my own culture.	5	4	3	2	1
Based on the understanding that culture and value are relative by nature, I am able to make objective and equal judgments about my culture and other cultures.	5	4	3	2	1
I am able to handle new situations confidently in a relaxing manner with “flexibility” that I’ve developed through trial and error in the experience of dealing with intercultural situations.	5	4	3	2	1
I am able to develop close relationships with people with different cultural backgrounds while respecting their identity.	5	4	3	2	1

(Statements about Abilities to Think)	Strongly Agree	Slightly Agree	Neither Agree or Disagree	Slightly Disagree	Strongly Disagree
I am able to understand the similarities and differences about different languages and cultures by comparing the elements in a consistent manner.	5	4	3	2	1
I am able to provide objective and appropriate explanation about my mother tongue and culture. I am also able to express objectively and sufficiently my opinions and understandings about different culture.	5	4	3	2	1
I am able to communicate for mutual understanding in Japanese language while taking into account linguistic and cultural differences.	5	4	3	2	1
I am able to develop my way of learning based on prior knowledge and experience about different languages and cultures.	5	4	3	2	1
I am able to continue learning foreign languages and different cultures for a lifetime, while constantly reviewing in practice the effectiveness of my learning style.	5	4	3	2	1